奴隷少女は規格外

猫師匠

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
奴隷少女は規格外

【Ｎコード】
Ｎ７８２２Ｗ

【作者名】
猫師匠

【あらすじ】
コンビニに行った帰り道、何故か異世界に来てしまった主人公が美少女を助けて冒険の始まりだ！　なんてことは無く、美少女と共に捕らえられてしまう主人公。奴隷の刻印で逃げる事もできず、かといって契約主をころ……もとい、ぶっ飛ばす事も出来ないのでそのまま売られ売られて行くお話。主人公ちょっとずつ最強系。第一部「完」第二部へ入る予定。

宛ての無い手紙

拝啓、お父様、お母様。

私、奴隷になりました！

いやいやいや……

どんな書き始め方だよ。

意味分かんないし、心配しないでくださいとか言っても説得力皆無どころか私の株価も急降下する勢いだよ！

話すと長いんですが、現在私は地球に居ません。

異世界？　って所だと思います。

火星とか月に居る訳じゃないよ？　間違っても私の頭がおかしくなった訳でも無いよ！

『ウールヴェス大陸』

これが現在、私が居ると思われる場所です。

大陸の東の端っこ、『セントリア貿易都市』

此処に住んでいる貴族の方に雇われました。

地図はありません。

私の美術評価が1だった事を知っている両親なら分かってくれる事でしょう。

職場は割と快適です。

三食昼寝（サボリ）がついて毎月の給料も少しですが頂いています。

仕事は掃除洗濯炊事と幅広く、旦那様の翻訳係なんてものもさせて頂いてます。

生き残る事と、人生を楽しむ事については一家言あるので、問題ないと判断することでしょう。

しばらくはそちらに帰れる事は無いと思うので、こちらの世界で気ままに生きて行こうと思います。

追伸

旦那様と言うのは雇い主の事ですので、あしからず。

宛ての無い手紙（後書き）

感想とかダメだしとか待ってます。

ポテチは何処、私のコーラは？

此処は何処、私は誰？

うん、一度は言ってみたかった。反省も後悔もしていない。

ただし――――

「此処は何処じゃあああああああああああああああああああああああああ」

叫ばせて下さい。

よく思い出せ、私。

名前は？　村雨沙耶（むらさめ　さや）だ。

性別、女性。

年齢、１……まだ１７だ！

黒髪、腰まで届くロング、ツリ眼、ツルペタ、童顔。

大丈夫、私だ。

記憶を辿ってみよう。

家を出たな、茶色い木製に見えて木製じゃない家のドアを開けて。

コンビニまで歩いた筈だ、徒歩2分もかからない距離だ。

買い物したな、ポテチとコーラ。

帰り道、光が見えた、此処に居た。

大丈夫、意味分かんねぇ……

周囲を確認。

木　木　木　木木木木　木木木　木木木　木木

結論、森。

道も無い、未知しかない。

周囲は暗くなり始める直前、と言ったところ、歩くのは危険過ぎると判断し、適当な木に登る。

地べたで寝るなんて危なすぎる。

もし森の熊さんに出会ったら忘れ物は自分に命になってしまう。

お、意外と快適かも……背中痛い。

とりあえず朝まで待とう――

辺りが騒がしくて眼が覚める。

「朝っぱらから何騒いでんだ！」

って、此処は何処だ。

寝起きで頭が回らない。

ああ、昨日もやったな此処は何処ネタ。

いやいや、そんな場合じゃないし。

「追え！　そっちに逃げたぞ！！」「はっはー、譲ちゃん譲ちゃん、逃げ場はないぜ～」「傷は付けるなよ！　大事な商品だからな！」

何やら物騒な声が……

下を見れば１６歳くらいの金髪美少女。

面倒事に巻き込まれた予感。

「何してんの？」

とりあえず声を掛けてみる。

「奴隷商人達から逃げてるんです！」

「へぇ～」

あら、声まで可愛い。

「……っ！？」

違和感に気がついたのか美少女がこちらを見上げる。

「やほ～」

美少女の顔が強張る。

可愛い子に恐がられるのは少し傷付くが、不審人物である自覚はあるので仕方無い。

「助けてあげようか？」

これでも武門の家柄で、そこらのチンピラに負ける事は無いという自負がある。

「……」

あからさまに警戒する美少女……って名前聞いてないや。

「私は村雨沙耶」

「……アイリス」

アイリス、アイリスね。

覚えた。

周囲の気配を読んで、相手の人数は5人程かな？　とあたりを付

ける。

ま、何とかなるでしょ。

愉しくなってきちゃった

私は木から飛び降りると、そのまま近くの敵へと走り寄る。

男、身なりは山賊の様にも見えるみすぼらしさ。

もちろん背後から走り寄る。

正々堂々？　何それ美味しいの？

首筋に手刀、一撃で意識を刈り取る。

後、４人。

また近くの男へと背後から近寄って首筋に手刀。

「変な奴が居るぞ！　気を付けろ！！」

運悪く発見されたらしい。

後３人、流石にキツイか？

辺りを警戒していた敵の背後に回り込んで背中を蹴り飛ばす。

倒れこんだ男に対し、踵を首へ振り下ろす。

グキッ、と言う音と共に沈黙。

後2人。

「周囲を警戒しながら馬車に戻れ！　体勢を立て直すぞ！！」

逃がすと思ってんのかね？

馬車へと向かって走っているのであろう男を発見。

側面へと回り込んで木の影から足を引っかける。

派手に転倒、首筋に踵を振り下ろす。

後1人か。

「畜生！　何処のどいつだ！？　こんな辺境の森に誰が居るってんだよ！！？」

馬車の近くで喚いている男の背後から忍び寄り、手を掴んで捻る。

そのまま足を掛けて上に乗る様に膝で背中を抑え込む。

「ねぇ」

「ひっ……お、俺は何も知らねぇ！」

いきなりそんなこと言われても……

困ったな、愉しくなってきちゃった。

「何であんなかわいこちゃんを追っかけてたのかなぁ～？　お姉さんに教えてくれる？」

「お、俺達は雇われただけだ。本当だ！　あの娘を王都まで連れて来いと」

おうと？　嘔吐？　王都か、地球にそんな国あったかな？

情報収集の為に今居る場所など、根掘り葉掘り聞き出して行く。

説明が面倒なので簡潔にまとめる。

ウールヴェス大陸、現在私が居る大まかな地名。

南のマイゼル山脈の麓に広がる森、現在私が居る細かい地名。

結論、日本じゃない。

最低でも私はその名前に聞き覚えはない。

他にも、あっちの方の村からアイリスを連れて行くためにあーだこーだと長ったらしく説明があるのだが、面倒。

そろそろネタ切れらしい最後に残った男の首に、手刀を叩きこんで黙らせる。

「終わった終わった」

立ち上がり、アイリスを迎えに行こうとしたところで、『狩り取れ、闇』と言う声。

え、何その中二――――――

意識が途切れた。

何その設定

迂闊だった。

５人しかいないと思い込んでいた。

感が鈍ったかな？　最近鍛錬とかしてなかったからなぁ……

現在馬車の中。移送……もとい、移動中。

奴隷商人らしい男たちは、人数が減って３人。

私の隣には金髪美少女こと、アイリスがちょこんと座っている。

身長は１６０くらい、結構な美人さん、長いふわふわの金髪最高！

「あの、わたしの所為で……」

ああ、アイリスは悪くないの！　だからそんな悲しい顔は見せないで！

「大丈夫、お姉さん強いから、何時でも逃げ出せるわ！」

「逃げ出そうと思っているなら止めておけ」

馬車を運転していた男から声が掛かる。

全身を包む黒いローブ。ハッキリ言って趣味が悪い。

「どういう意味よ」

「左手に奴隷の刻印を押させてもらった。逃げだせば命は無いぞ。もちろん、歯向かってもな」

何それと左手を確認して見れば、何やら黒い刺青の様なモノが。

乙女のやわ肌に何してくれとんじゃ！！

「その刻印は契約主、今は俺になっているが、その契約主から一定距離を離れると激しい苦痛を与えるように設定してある。そして契約主が命を落とせば刻印を持っているお前も死ぬ」

何その設定……

「悪いとも思って無いが、お前にはアイリスの人質になって貰おう」

だから、何、その設定。

何あの苦痛。

設定じゃなかった……

男共が川で水浴び……まて、これは誰得だよ。

まあいい、その隙に目を盗んで逃げようと思ったんだけど、たぶん３００メートルくらい離れた所で圧迫される様な不快感が私を襲った。

これぐらいなら大丈夫と判断した私は、そこからさらに１００メートルほど歩いて行動不能になった。

全方位から圧迫される様な不快感。

脳ミソをかき回さる様な頭痛。

体内をグチャグチャにされる様な痛み。

苦痛はローブに回収されてからも３０分ほど続き、私はその日一日を硬い馬車の床で過ごす事になった。

その前もその後も硬い馬車の床で過ごしてるけどね。

確かにこれは逃げられない。

何その設定（後書き）

感想とか指摘待ってます

物理法則完全無視

逃げるのもころ……傷つけるのもダメらしいので、大人しく連れて行かれることにする。

長いモノには巻かれろ。これ大事。

「でね、その子が――――」

「そんな事あるんですか！？」

ええ、大人しくしてますよ。

「やっぱり男ってダメよね！」

「そんな事ありませんよ。フィンはちょっと頼りない所ありますけど」

「なになに、彼氏？　アイリスちゃん可愛い～」

「や、彼氏とかでは無く――――」

顔が真っ赤に染まるアイリスちゃん。マジで可愛い、食べちゃいたい。

「大人しくしてろ！」

怒られた……

十分大人しくしてるんだけどなぁ、姦しいだけで。

「もうすぐ王都だ、静かにしていろ」

捕まってから1週間（たぶん）がたった。

その間に随分とアイリスちゃんとは仲良くなれたと思う。

移動距離的には長かったのか短かったのかはよく分からん。

山道とか森とか結構曲がったりうねうねしたり、たぶん自動車で移動すれば1日走ればいい位の距離だと予想。

馬車の窓から顔を出して外を見る。

いつの間にか森を抜け、草原の道を走っていたので、その姿は一目で確認できた。

でかい……城？

「うわ～　ホントに日本……ってか地球でも無いぽいなぁ～」

城の周りに大地が浮いて存在していて、そこにも城やら家やらが確認できる。

物理法則完全無視。

そして私のボキャブラリーの少なさに絶望した。

城とか家とか馬鹿か私は、もっとこう、なんて言うのかな……パル○ノン神殿の様な荘厳さとか、いや、パルテ○ン神殿なんて見た事も無いけど。

比喩表現さえ出てこねぇ……

最低でも和風の城じゃなく、西洋風の城だとは言っておく。

「ねえ！　どれが王都？」

数えきれないほどの浮き島（？）が有り、城も見えるだけで５つはある。

「アレ全てが王都だ。一番上に在るのが王城、その下に1級貴族たち、次いで2級貴族、3級貴族、学園区画と在り、地上には平民や商人、兵や騎士、文官も下だったかも知れん。まあ、幅広く住んでる筈だ」

なるほど、文字通りの城下町って感じだね。

アイリスから聞いた話とかをまとめるとこうなる。

上に昇るに従って偉い人が住んでる。

人がいっぱい。

神子様とか住んでるらしい。

聖女とかいるらしい。

アイリスちゃんの胸は大きい。

今年で16歳。

私より2つ……いえ、1つ下でこのマシュマロメロンとは……

侮れん。

王都の説明じゃない？

どーせ、私には縁の無い所ですから。

アイリスちゃんを依頼主に――黒いローブの人も雇われただけらしい――届けてから、私はどっかに売られるらしい。

まあ、奴隷制度も想像していたよりも酷くは無いらしく、馬車馬よりは良い生活が出来るらしい。

ごめんよ馬車馬さん。私、幸せになるからね。

物理法則完全無視（後書き）

感想　訂正　矛盾　指摘　待ってます

雪国に行きたいか！？

山賊風の男たちとは別れ、王都に入る。

王都の中は中世のヨーロッパ風。

本物は視た事ないけどね。たぶんそんな感じ。

露店があって、店があって、人がいて。

どこもかしこも賑わっている。

「いつもこんな感じなの？」

「祭りが近いからだろう。いつもはもう少し穏やかな街だ。お前はその祭りで売る予定だからな」

私の質問にローブが応える。

最後の一言はいらなかったよ。

周りを見渡せば身なりの良い人から魔術師っぽい人、騎士っぽい人、商人や平民入り乱れて、どの人を見ても笑顔。

うん、いい街だ。

そこで違和感。

看板を見る。

商品の説明らしきモノを見る。

読める……と言うより意味は分かるけど、日本語じゃない？

今まで当たり前の様に日本語で喋ってたけど。あれ？

「ねぇ、アイリスちゃん、アレなんだと思う？」

「ゼシの肉を串焼きにしたものだと思います。美味しいですよ」

適当に指をさしてアイリスちゃんの口に注目。

やっぱり、日本語じゃない。

聞こえてくる、いや、私が認識しているのは日本語だが、口の動きは全く違ったものだった。

「あー、あー。本日は晴天、本日は晴天」

「どうかしたんですか？」

「いいえ、何でも無いわ」

自分が発している声やら、口の動きに注意して気がついた。

私も日本語喋ってないし……

なんだろう。これ？

たぶんこの世界、と言うより、アイリスちゃん達の共通言語を喋っているんだろうけど。

便利な脳内変換とでも思っておけばいいのかな。

言葉は通じ無いより通じた方が便利なのは確かだしね。

「ここからは徒歩だ。降りろ」

馬車から降ろされ街の中心に在ると思われる大きな城へと入って行く。

馬車はどうするんだろうと思っていたら、門の近くの兵士達が持って行ってしまった。

ローブもアイリスちゃんも気にして無い様だし、まあいいか。

とぼとぼ後ろを付いて行く私とアイリスちゃん。

城の中って独特な雰囲気があるよね。

場違い感、半端ないっす。

大きな扉の前で立ち止まるローブ。

「入れ」

入ってみれば広間みたいなんだけど、何も無い。窓も無い。

照明に照らされた、ただ広い空間が広がっているだけ。

「中心まで歩け」

言われた通り真ん中に進み出る。

何か意味あんの、これ？

そう思っていたら、床が光り始めた。

何も無いと思っていた部屋の床には、巨大な魔法陣だと思われるモノが書かれていて、それが青白く光っているらしい。

大き過ぎて何が書いてあるのか把握できない。

それと私に詳細な説明は無理、美術１は伊達では無いのだ。

教師には「１でも与え過ぎだと思っている」とか言われた事あるし……

そこまで酷くないよ！

何か操作していたローブも私達がいる真ん中へとやってくる。

「気分が悪くなるかもしれんが、一瞬だけだ、我慢しろ」

ローブの言葉と共に軽い浮遊感。

酷いエレベーターよりはまし、という程度なので、そこまで気分が悪くなるような事も無い。

しかし、アイリスちゃんは違った様で、ちょっと顔色が悪くなっている様な気がする。

３０秒ほどで、浮遊感が収まった。

「出るぞ、付いて来い」

え？　何が変わったのか全く分からないんですが。

ドアを開けてびっくり。

そこは雪国でした。

すいません嘘付きました。

でも内装が変わってる。

さっきまで質素な城の中だったのが、今度はもっと豪華、荘厳って言うのかな？

なんか偉い人が住んでるような……ってまさか。

手近な窓に駆け寄る。

さっきは窓も無かったのに、じゃなくて！

たっけー……

見て見て、ほら。

あんな所に雲があるよ～。

遠い目をする私の眼下に、白い雲が広がっていた。

あ、鳥が飛んでる～、やっほー。

……っ！？

思わず現実逃避していたらしい。

たぶん今居るのは、下から見上げた時に見えた一番上の城。

何処のラ○ュタだよ。

……○ルスって叫んでも大丈夫かな？

落ちたりしないかな？

「バルシ」（ボソ）

チキンな私を許せ。

「何をやっている、こっちだ、早く来い」

またトボトボとローブの後を付いて行く私とアイリスちゃん。

城の中って独特な（以下略

場違い感、５割増しで半端ないっす。

右へ曲がり左へ曲がり。

うん、逸れたら私迷子確定。

は〇れメタルよりもデロデロになって発見される自信あり。

大きな扉の前でローブが立ち止まる。

如何にも偉い人がいますって言う感じの扉。

豪華、煌びやか、本格サスペンス……は意味わかんねぇな。

ローブは徐に、ってか乱雑にドアを押しあける。

それでいいのか、ローブ。

ドアを開けると……って此処マジで王様とか居そうなんで

すけど。

赤い絨毯、奥には金色の椅子、着飾った小太りのオッサン、周りには騎士が6人。

あ、ごめん、王様っぽい人の事、太ったオッサンとか表現したかも、今の無しでお願い。

「連れて来たぞクソオヤジ」

……え？

おやじ、オヤジ、親父？

父？？　え？　この偉そうな奴が？　ローブの、父？

きっと何かの聞き間違いさ、だって此処は一番上にある城、一番偉い人が住んでるはずなんだから！

「実の父に対して、それ以前に国王に対しての言動では無いぞ。まったく、親の顔が見てみたいモノじゃ」

実の父、だと！？

「俺もお前の顔をお前自身に見せてやれたらと何度思った事か」

「おお！　お前は良く父親にだと言われているからな、お前の顔を見れば自分の顔も想像できる訳じゃな」

「くっ……虫唾が走る！」

なんか普通に憎まれ口叩き合ってますけど。

アイリスちゃん、ドン引きを通り越して、後ろの扉を開けて今にも逃げ出しそうな感じ。

そして私も逃げ出したい。

このジジイって本当に王様なの!?

その王様に対して此処まで砕けた口調で喋れるこのローブって何者？

「お前の所為でお嬢さんたちが退屈しておるだろう」

王様が此方を向く。

正確には、アイリスちゃんの方を。

「ぐっ……納得は出来んが、その通りだな、話を進めよう」

私、帰っちゃダメですか？

チキンな私を許せ（後書き）

内容の切り方　やってみたかっただけ

反省も後悔もしていない

感想とかいろいろ待ってます

フラグ立ちました？

「先ずはこの度の非礼、許して欲しい」

言葉と共に王様が頭を下げる。

えーっと、私にどうしろと？

「頭を上げてください」

アイリスちゃんナイス！

「いや、私の我がままで――――」

「困ってんだろクソオヤジ、事情を知らないんだから説明してから謝れ」

「いやしかし……そうだな、その後で私の事が許せないのであればいくらでも罵ってくれて構わない」

王様の長い長い説明が始まった。

長すぎるのでまとめよう。

偉い人の話は長くてダメだね、もっと簡潔に、短くするべきだと私は常々――――

閑話休題。

アイリスちゃんは王様の隠し子らしい。

王様もうすぐ死ぬらしい。

アンチ現王派がアイリスちゃんを利用しようと考えていて。

それを未然に防ぐために呼び戻したとか何とか。

どっちにしろ面倒事なのは変わらないが、王に守られている方が安全だと判断して、盗賊に見せかけた兵士とローブが向かったのだとか。

テンプレですね、わかります。

あれ？　私のした事って大きなお節介でした？

兵士の人たちも結構ノリノリでしたよね。

待てよ……これはアイリスちゃん護衛フラグが立ったんじゃね？

このまま私も学園入学とか有るんじゃね？

まあ、無いよね。

説明を聞いたアイリスちゃんは俯いて何かを考えている様だ。

「王位継承権については気にするな、別の人間が継ぐ予定だ」

その様子を見てローブがフォローを入れる。

フォローにもなってない気がするのは私だけでは無いはずだ。

「私は、これから何をすればいいんでしょう」

決意したのか、アイリスちゃんは王をまっすぐ見つめて言葉を発する。

「特に何をする必要はないのじゃが、王立魔術学園に入学してもらう事になるだろう」

「学園には最低でも3年、このクソオヤジが死ぬまでは入っていて

貰う」

王の言葉をローブがフォロー。

そして、また長々と説明が入る。

要点だけまとめると――

え？　まとめる必要ない？　そのまま流せ？

私のやる事が無くなるじゃないか！　暇なんだよ、ぶっちゃけ。

学園は一種の中立地帯。

入っていれば利用される事も無く。

王が利用する事も出来ない。

私、帰っていいですか。

疎外感、半端ないっす。

話が分からないだけならいいんだよ。

この世界が分からない私にどうしろと……

フラグ立ちました？（後書き）

感想　ダメだし　誤字脱字
指摘とか待ってます

どう考えても変態です

その後1時間くらいで解放された私は、また転送部屋へと来ていた。

そこにアイリスの姿は無く、私とローブだけが魔法陣の上に居る。

「ねぇ、アンタって実は偉い人？」

「何だ急に……」

「いやいや、王様っぽいジジイと親子だって言う話じゃん？」

「王をジジイ呼ばわりとは……お前に常識と言うモノは無いのか？」

ああ、やっぱりあの人王様だったんだ。

って事はコイツ王子様？

別の奴が王を継ぐとか言ってたけど、まさかね。

まあ、もう会う事も無いし、王様の事はジジイと呼ぼうがクソジジイと呼ぼうが関係ないしね～。

「で、アンタって偉い人？　ってか名前も聞いて無かったね。私は村雨沙耶」

「ムラサメサヤ？　珍しい名前だな」

「あ、こっち風に名乗るなら、サヤ＝ムラサメかな？　沙耶が個人名で、村雨が家族の名前って感じ？」

「この国の人間ではないのか？」という質問に、「たぶんこの世界の人でもないっぽいんだよね～」とか答えられるはずも無く、無難に「そうだよ～」と答えておく。

その後は何事も無く目的の階（？）に付いたらしく、ローブが部屋を出て行くのに付いて行く。

そろそろそのローブを取ったらどうだ、私は素顔すら見た事が無い。

ってか私名乗ったのにローブ結局名乗らんかったし……

部屋を出るとまた違った場所らしく、窓の外を見れば上には今まで居た城が見えた。

結構高さもあるらしく、下には幾つもの浮き島がある。

どうして偉い人は高い所に住みたがるんだろうか。

見降ろしながら「見ろ！　人が○○の様だ！！」とかやっているんだろうか？

それともバカなの？　煙と一緒に高い所に登りたいの？

魔法陣がある建物を出て、そこからちょっと行った所に在る建物へと入って行くローブ。

もちろん私も付いて行く。

離れ過ぎると、またあの苦痛が私を襲うだろし、逃げ場も無いしね。

建物、結構立派な洋館入ったローブは、やっとそのローブを脱ぎ捨てた。

「「「「お帰りなさいませ、ご主人様」」」」

そして何処からともなく、メイド勢の挨拶が――――

「へ、変態だ」（ボソ）

「そこ！　これは俺の趣味じゃないからな、勘違いするな」

だってメイドに御主人様とか呼ばれて悦んで、もとい喜んでいるような人種って変態以外になんと呼べば……変態紳士か！

ってか初めてローブの素顔見たかも。

普通だった、地味、さっきの王様に似て……は居ないな。

金髪ショート、よく見かける。

碧眼、テンプレですね、分かります。

身長も普通、体格も普通。

結論、平凡。

「大体、此処に居る奴らはお前と同じ奴隷だ」

やっぱり変態だ！！！

逃げ出そうとしたのに、あっさりと捕縛される。

「待て待て待て！　何か勘違いしてないか？　こいつらは全員商品だ、これから始まる祭りでのな」

ああ、なるほど。

そして私も売られるんですね。

でもやっぱり変態ですよね。本当にありがとうございました。

イメトレ

ローブに連れられて客室らしき処に入る。

メイドさんがお茶を持ってくる。

谷間、いいなぁ～ってオヤジか私は……

お茶も美味しい。紅茶っぽい味、ちなみにノンシュガー、ノンミルク。

「まずお前の待遇についてだが――」

「待って」

「成り行きとは言え――なんだ？」

どうしよう。

止めたは良いけど、説明して信じてもらえるだろうか。

ローブが――今はローブ着て無いけど――割と良い人で、身分もしっかりしているのは分かったんだけど。

イメージしてみよう。

『実は……私異世界から来ました』

『医者は必要か？』

ダメだな、頭悪いとしか思えない。

テイク２

『祖国に帰りたいんですけど』

『送って行っていやろう、祖国は何処だ？』

『たぶん、異世界です』

『……医者は必要か？』

どうしてこうなった……

テイク３！

『この人痴漢です！』

『何を……っ！』

『キャー！　タスケテー！！　オソワレルー！！！』

ドタン！　バタン！

『医者を呼べ！』

まあ、勝てる訳ないよね。

一回負けてるし、たぶん手加減されて。

テイク４！！

『ワタシ　コノクニ　ノ　コトバ　ワカリマセン』

『ふざけるな』

今一番叫びたい言葉だよ。

ふざけるな！

もっと良い案は出てこないのか、この頭は！？

「何も無いなら話を続けても構わないか？」

「えーっと……」

此処は直球で行くしかない！

「お名前聞いても宜しいでしょうか」

何故だあああああああああああああああ！！！

違うだろ私！　どうして聞いた！？

「そう言えばそうだな、俺はゲイル＝シュタットフェルド＝ファイン＝リースフェル。長いからゲイルで構わない。短い付き合いになる事を祈って、よろしく頼む」

そして律儀に応えるなよ、そこのロープ！！

どうしよう、どうすれば？

助けて神（ゴット）！！

『助けて、欲しいか？』

（え！？）

『力が、欲しいか？』

（いえ、力より知恵が欲しいです）

『この難局を乗り切る、力が欲しいか？』

（いや、だから力より知恵だっつってんだろ！！）

『ならば、授けよう』

（いえ、もう帰って下さい。ホント、何も要らんから帰れ！）

そして、私は閃いた！

「帰っても、いいですか？」

「……」

イメトレ（後書き）

感想とかいろいろ待ってます

言えなかった言葉

ダメでした。

その後また説明ですよ。1時間くらい。

寝たい、眠い。

でも話はまとめる。

この仕事が無くなったら、私が居る意味がないじゃない！

奴隷制度とは言っても、要は派遣社員みたいなモノらしい。

2級以上の貴族が浮浪児を拾って来たり身売りを買い取って、それを色んな所に売る。

つまり、浮浪児だと勘違いされて、私は保護されたらしい。

着用していた物がスウェットだったのも、勘違いの要因らしい。

この国、と言うよりこの世界の女性はズボン履かないとかなんとか。

要するに、そんな事も知らない子供（東洋人は若く見られるって本当だった）が森に居たら普通保護しますね。

ちなみに、3歳以上若く見られた年齢については訂正しなかった。

説明を続けよう。

奴隷には1年の拘束期間が在り、その期間が過ぎれば自由の身、そこで働くもよし、また契約主、つまり2級以上の貴族の処に戻って来て、新たな雇い主を探すもよし。

1年以内に逃げ出そうとしても、刻印があるため逃げる事は出来ない。

買い取った側は奴隷を大切に扱っているらしい。

2級以上の貴族相手に喧嘩を売るバカはいないし、2級以上の貴族は性格面も評価の対象になっているため、よっぽど上手くやらない限り、王様権限で即3級落ち、運が悪ければ奴隷の仲間入りだってあり得る。

信用で成り立ってる世界だね。

通信網とか、そこまで発達してる訳でも無いみたいだし。

余談になるが、この話の途中で、私の脳内変換が『奴隷』という単語を『派遣社員』に変えてしまうという事があった。

無理やり奴隷に戻したけど。

最初はラッキーとか考えてたんだけど――――

派遣社員の刻印とか言われてみれば分かる。

情けなさ過ぎる……

脳内変換は私のイメージと強い結びつきがあるらしく、私のイメージが単語の意味を変えてしまうらしい。

つまり、この世界で『奴隷または派遣社員』と言う単語が有ったとする。

その単語のイメージが奴隷に近いと思っていれば『奴隷』と脳内変換され、派遣社員に近いと思ってしまうと『派遣社員』と脳内変換される。

まあ、奴隷と呼ばれようが心は自由。

私は自由に生きる！

そして現在、私は屋敷の部屋の中。

外は既に闇の中。

どうしてこうなった……

あ、ポテチ食べよ。

コーラ――温い……

ま、仕方ないか。

ポリポリ、カリカリ。

ゴクッ、うむ。

面倒だし、明日考えよう。

豪華なベットに潜り込んで寝る事にする。

きっと、全て夢さ。

目が覚めれば何時もの天井を見上げ、何時も通りに学校へ行く。

他愛も無い話で盛り上がり、退屈な授業を受け、放課後は道草しつつ家に帰る。

そんな明日が――――

来ないよねぇ……

窓から差し込む朝日で目が覚める。

「見知らぬ、天じょ――――」

「おっはよ～新入り！　朝だ、起きろ！！」

私のセリフを返せ、一度は言ってみたかったのに！！

「起きろサヤ、ゲイルが呼んでる！」

ゲイルが？

何の用だろう。

大体の説明は昨日聞いた筈だけど。

言えなかった言葉（後書き）

フラグ　ポテチとコーラ

回収しました

異世界何度目かの朝。

変態貴族の家１日目の朝。

現在、私は厨房に居ます。

何故かって？

それを説明する為に、時間を少し戻そう。

「全員集まったようだな」

玄関ロビーに集められた１５人の執事とメイド。

もちろんその中に私も居ます。

黒を基調としたロングスカートのメイド服着て。

振りるとかは少なめ。
実用性重視って感じ。

そう、だからコスプレじゃない、これはコスプレじゃないんだ！

「祭りは明後日から一週間行われる。その期間中にお前たちの雇い主が決まる訳だが――」

祭りか～、楽しそうだな～。
屋台とか花火とか出るのかな？
無いならアイディア料とかで金とか貰えないかな。
でもこっちの金銭感覚とかまったく分からないしなぁ～

「――と言う訳で、最終試験を行う」

……は？

「はい！」

「どうした、サヤ」

勢いよく手を挙げた私を見つめる３０の瞳。

しかし、そんなプレッシャーに屈する私じゃない。

「意味が分かりません！」

「……昨日も説明したと思うのだが」

待て、昨日？

思い出せ、きっと思い出せる。

私はやればできる子！

……

……

……

……あ！！

そう言えば何か言ってたな。

奴隷としての適性検査がどうとか。

ローブ改めゲイルによると――

面倒だな、三行でまとめよう。

ゲイル結構偉い人。

奴隷を買う側も良い人材求めてる。

ゲイルにもプライドとか信用とかあるので半端なモノは売れない。

確かこんな感じだった気がする。

「思い出しました。で、私に何をしろと？」

「それをこれから説明するんだ……」

若干の呆れが混じる声に少し凹む。

眠かったんだから仕方無いでしょ。

またまたやって来ました、まとめの時間！

何？　別に待って無い？

聞いてくれないと、内臓ぶちまけちゃうぞ♪

もちろん、お前の内臓を――――

と言っても、今回は二行で終わる。

家事。

礼儀。

これだけ。

食材については見てみないと分からないが、礼儀なら任せろ。

全く出来ない！

大体貴族？　何それバカなの死ぬの？

むしろ死ねばいいのに。皆死ねばいいのに！

出来なくても1年間また頑張ってください。

っていう救済措置があるらしいから、まあ、問題無いと思いたい。

ちなみに、3年間買い手が付かなかった場合、捨てられるらしい。

結構シビアな世界だよ。

今年は無理だと諦めてる私としては、来年に向けての予行練習って感じかな。

それから、悩んでいた今後について。

まず情報が足りない。

動こうにも右も左も分からん状態じゃ動きようがない。

私が何故此処に、この世界に来たのかも分からんし、目立ち過ぎるのも良くない。

偶然この世界に来ただけならまだ良い。

誰かに喚ばれてこの世界に来ていた場合、これが問題だ。

その喚んだ人間は、私を利用しようとして喚んだ確率が高い。

何より、説明が面倒。（ここ重要）

私の説明だと、病院送りにされるのが火を見るよりも明らかだし、万が一信じて貰えたとして、それじゃあどうしろとって話になってしまう。

異世界人だとバレないように、地道に情報を集め、帰る方法を探す。

これが当面の目標というか、方針。

だったんだけど……

コスプレじゃないから！（後書き）

感想　指摘　いろいろ待ってます

普通に涙出た

これは無い。

何これ？

これが厨房？

バカにしてんの？

食材はある、見た目だと何が何だか分からんけど。

調理器具もある、包丁、まな板、フライパン、見た感じ一通り全部。

調味料が無い、食材本来の味？　化学調味料万歳！

って事で、困った。

塩と胡椒は見つけた。

最初は塩も胡椒も見当たらなくて、バルとかゲシの実とか書いてあった瓶を見つけ、何か分からんかったから、舐めてみた。

結果、バルが塩、ゲシの実が胡椒と判明。

私の脳内変換は固有名詞に対しては上手く働かないという事も判明したが、分かった瞬間、バルが塩、ゲシの実が胡椒と脳内変換されるようになった。

印象によって変換内容が変わる弊害らしい。

そんなどうでもいい事は置いといて。

調味料が少なすぎる。

移送中は現地調達が基本で、こんなもんかと諦めていたのだが、昨日の夕食も良く言えばシンプル、ぶっちゃけ質素なモノだった。

それでも美食に対しての希望は捨てきれず、奴隷に対してはこんなもんかと思っていたのだが、調味料の少なさを見て原因が判明。

これは料理自体もそこまで発展してないと想像できてしまう。

ゲイルと言う結構偉い貴族でこれなのだ、一般家庭には塩と胡椒すら無いかもしれない。

これは情報収集と並行して、調味料の発見と普及にも手を出さなければ！

むしろ情報収集は料理中心で、この世界の情報？　食材と調味料さえ分かればこっちのもんだ！

しかし、困ったな。

何を作ろう。

私の周囲では既に料理を始めている人もいる。

試験は３つの班に分かれて、家事、礼儀を順番に審査されるらしい。

私は第一班。料理の後にお茶入れ、掃除と洗濯。休憩入れて礼儀の試験。

最初の課題は一品料理。

評価対象は見た目と味。

適当に野菜らしきモノを手に取る。

齧る。

あ、これ人参だ。

色は白く、大根の様な大きさだったが、味は人参だった。

他の食材も適当に選んで齧ってみる。

判別できた食材は、最初の大根の様な人参、キャベツの様なタマネギ、そのまんま長ネギ　ｅｔｃ　ｅｔｃ。

トマトの様な生姜を齧った時点で判別は諦めた。

普通に涙出た……

肉や魚介系は生で齧る訳にもいかないし。

まあ、適当に作ろう。

齧り判別した食材を適当に集め、肉は未知数なので避けて、魚介系で固める。

これまた何の卵かは分からんが、味は大して変わらないだろうと思い使う事にする。

米はあった。

乾燥させて蜂蜜やら色々な栄養食と混ぜて兵糧にしたり、粥にして病人食や離乳食として使われているらしい。

一般人はあまり食べないとの事。

魚貝や野菜を同じ鍋で下茹で、その間に鍋でご飯を炊く。

これでも独り暮らしで自炊、バイト先で厨房を手伝っていた経験がある。

料理なら適当にやっても、それなりのモノが出来る。

即席魚介系ダシ汁をフライパンに出して煮詰める。

水分を出来るだけ飛ばしてからじゃないと、ベチャベチャになって味も見た目も悪くなってしまう。

ご飯が炊ける頃合いを見て、野菜を切り始める。

ダシの水分がそこそこ飛んで来たところで野菜を炒めつつ、魚介を適当に切って入れる。

火力も申し分ない。

まあ、何とかなりそうだな。

周りからの視線も気になり始めたし、さっさと仕上げてしまおう。

そして、完成した料理はゲイルが待つ部屋へと運ばれて行く。

予想してた人、その通り、炒飯作りましたよ。

味見はしたが出来はそこそこ、不味くはないが、やはり何かが足りない味だった。

普通に涙出た（後書き）

主人公最強までどれだけかかることか＾＾；

感想とか待ってます

一番大事なモノは『食』

なんか疲れた、巻いて行こう。

お茶の準備。

適当に入れる。

紅茶？　日本茶以外、飲みませんから。

次、洗濯。

実家には洗濯機が無かったので懐かしい気持ちになったよ。

洗濯板……同士よ！！！

昼休憩、ひま～。

礼儀。

まったく分からんかったよ。

日本の礼儀はそれこそ叩き込まれてはいるが……

西洋のそれは分からん。

着物を寄こせ！

以上、ダイジェストでした。

そしてベットイン！

「あ～、疲れた～、温泉入りてぇ～」

この世界は基本タオルで体を拭くか川で水浴び、ちょっと豪華でシャワーを浴びられる程度の水道設備しかない。

温泉が湧いている所も探せばあるかも知れんが、天空の城に水道設備は期待できない。

温泉は年内に見つけられればいいが、シャワー設備は出来るだけ早く欲しい所だ。

料理については、朝から研究しよう。

ダシは欲しい。

魚介系は割と上手く行ったので、今日の余りに色々足してみよう。

小麦粉に似た物はあったので麺類を作ってもいいかもしれない。

ラーメンやうどん、でも肝心の醤油が無いんだよな。

米はあったし、味噌ぐらいならあるかも知れん。

何か大事な事を忘れている気もするが、今日は疲れた。

合格発表は明日の朝らしいので、今日はもう寝る事にしよう。

「お姉ちゃんまた負けたの？」

大の字で畳に転がっている私を見下ろす妹。

妹よ。ボロ雑巾のような姉を見て、そんな笑顔で言う事かね。

この感覚だと、左腕……3日は使い物にならんなぁ～。

「抗ってないで、身を任せちゃえばいいのに」

その感覚が分からん姉に過度な期待はしないで欲しい。

「紗希、次はお前の番だろう」

「あ、ホントだ！　教えてくれてありがと、お兄ちゃん」

兄がいつものシケた面で私の横に腰を下ろす。

「またボロ雑巾か」

悪かったな、どうせ落ちこぼれですから。

「お前は本家では唯一まともな人間だからな、出来るなら家を出た方が良い」

実の妹にそこまで言いますかこの兄は。

「勘違いするな、善意で言ってやってるんだ」

善意の押し売りは迷惑だよ。

私だって才能が欲しい。妹の半分でいいから。

「お前、血の衝動が無いだろ」

あ～、やっぱり分かる？

無いんだよ、まったく、これっぽっちも。

「潜在能力ならお前の方が上だと思ってたんだが、それを活かす才能が無いんじゃ笑えないな」

悪かったな、才能なくて。

「妹は１００年に１人の天才だとか言われちゃいるが、俺でさえ壊れてるとしか言いようが無い」

可哀想だよ、と呟く。

体を起こし、妹の戦いを見る。

それは試合では無く死合、稽古では無く殺し合い。

それでも、妹は楽しそうに、愉しそうに笑っている。

何だろうね、この劣等感は、人外魔境だよ。

「お前は家を出ろ。まともでいられる内に、こんな壊れた血筋とは縁を切った方が良い」

その後は、他愛もない雑談。

意識が霞む。

ああ、夢か。

驚異の着衣（前書き）

この話はフィクションです
実際の（ｒｙ

驚異の着衣

ベットから這い出る。

懐かしい夢を見た。

しかし、気分は最悪だ。

実家の事なんて今更、思い出したくも無い。

私は普通に暮らしたいのだ。

家を出ろとは言われたが、まさか世界を飛び出すとは兄だって予想してなかっただろう。

私だって予想して無かったよ。

妹は壊れた様に元気だろうか。

兄はシケた面だろうか。

思考がまとまってないな……

久々に早朝鍛錬でもしようと着替える。

メイド服では無く、此方に唯一……ではなかったけど、持って来れた現代の品。

ポテチとコーラは食べちゃったし、残っている現代品はこれだけだ。

伸縮性抜群、通気性はそこそこ、寝巻に最適。

スウェットである。

コソコソしながら庭に出ると、誰もいない。

当たり前か、都合は良いので、そのまま練習に入る。

無銘流。

厨二臭い名前だが、実際には戦国時代から続く由緒正しい流派でもある。

鍛冶屋が銘を刻まなかった様な駄作でさえ扱う事から、この名前が付けられたとか何とか。

もともとは領主を失い落ちぶれた武芸者達が寄り集まって出来た流派らしく、どんな武器、武術、技術でも扱えるように鍛錬し始めたのが始まりらしい。

江戸時代でも何度か歴史に関わる様な偉業を成し遂げたらしいのだが、その名が歴史に残る事は無かった。

名前の通り、無名で無銘。

利用された後は捨てられるだけの流派である。

適当に思考しながら体を動かす。

型も無ければ、構えも無い。

どんな武器でも扱えるように。

どんな武術でも扱えるように。

一通り体を動かし、部屋に帰ろうと息を整える。

「見事なもんだな」

「見学なら、もう終わったんで帰れ、暇人」

「契約主にその態度は無いんじゃないか？」

覗き見しているような変態紳士ゲイルに礼儀は必要ない。

「今めちゃくちゃ失礼なこと考えなかったか？」

「何を仰るんですか、私（わたくし）の態度に何か失礼な部分があったのなら素直に謝罪をしますが？　契約主である変態貴族のゲイルさん」

「そこまで言われるとは流石に予想していなかった……」

地味に落ち込んでいる様だ。

適当に話を合わせながら受け答えする。

早く汗の処理したい、べたべたする。

やっぱり早朝鍛錬なんてするもんじゃないね。

誰だよ、早朝鍛錬とかやり始めたのは……私か。

寝起きの私を殴り飛ばしてやりたいね。

「――――でな、俺の、ってちょっと待て！」

「え、何？　私早く部屋に戻って二度寝したいんだけど」

屋敷に戻ろうとした私を引き止めるゲイル。

「いや、もういい」

まったく、何がやりたいんだろうね、この変態貴族様は――――

「何度も言うがアレは俺の趣味じゃないからな！？」

「勝手に思考読まないでくれますか？」

「思いっきり声に出てたからな、まったく」

今度こそ、私は屋敷に――――自分の部屋に戻るために歩き出す。

疲れた、汗拭いたらもう一回寝よう。

驚異の着衣（後書き）

感想　アドバイス　冷やかし　待ってますよ～

重大なお知らせ

合格発表。

諦めてる私でも緊張するんだ。

他の人たちの緊張感は半端無いだろうね。

またも玄関ロビーに集められた私含め１５人の執事とメイド。

これから変態貴族ゲイル様からのお告げ、もとい合格者発表である。

合格者は明日から始まる祭りで売られる為の準備を始めるらしい。

合格でも不合格でも待っているのは地獄ですね、分かります。

「全員揃っている様だな」

ゲイルが階段から下りてくる。

「今回の合格者だが――――」

緊張の一瞬。

「全員合格とする」

え？

今なんと仰いましたかこの変態は。

全員

合格？

「変た……ゲイルさん、質問です！」

「何を言い直したのかはあえて問わんが、何だ」

「全員合格って私も？　私礼儀とか全然できなかったんだけど」

「ある程度できていれば問題ない。後は実地で覚えろ」

あ～、なるほど。

判断基準は私が考えてた異常に低かったらしい。

確かに料理とか「それは生ごみですか?」って聞きたくなる様な物もあったし、そんなもんか。

いや待て、って事はなにか、私売られるのか……

奴隷生活かぁ～。

人権とかあるのかな。

酷い扱いは受けないって分かってはいても、私の知識だと奴隷ってイメージが、愛玩ペット的なね。

いや、これ以上は何も言うまい。

流れに身を任せてしまおう。

「全員荷物はまとめておけよ。使っていた部屋の掃除も忘れるな」

言い放ち去っていくゲイルの後姿を眺めつつ、海が見える所に住

みたいな～とかどうでもよく考えている私である。

此処で重大なお知らせ。

この世界の情報まったく集めてねぇ！！

忘れてた。

そんな私は今何をやっているかって？

ダシ、取ってます。

こっちのお肉は面白いね。

煮ると色が紫になったり、焼くと良いダシが取れたり。

ラーメンの様な物も作ってみた。

お昼はそれをみんなに振る舞った。

味は塩。

味噌とか醤油とかは無かったのでこれは仕方ない。

こっちには麺って概念が無かったので、最初は恐る恐る口を付けていた皆（ゲイルは除く）も、食べ始めれば口も利かずにすごい勢いで食べていた。

もう夢中になってましたよ、ええ。

現時刻は夕方、明日は祭。

この世界の常識ぐらいは仕入れておくべきだと、事前に調査しておいた書庫へと向かう。

今までは他の人を模倣しつつ生活できていたのだが、これから向かう所に私以外の奴隷や使用人がいるとは限らない。

最低限の常識やマナーはそろそろ覚えないといけない。

既に手遅れとか思ってないよ、思ってない、思ってない。

ローブ大好き

周囲を確認。

右、誰もいない。

左、誰もいない。

上下、居る訳ないな。

扉を開け、書庫に入る。

「やあ」

「あ、失礼しました～」

書庫を出て、扉を閉める。

誰だろう、誰か居た。

黒いローブ着てたけど、この世界の人はローブ大好きだな。

まあ、ここで情報を集めなくても、きっと大丈夫さ。

今日は大人しく帰――――

「待ちたまえよ」

――――っ！？

横から声をかけられ、飛び退きながら、その相手に対して構える。

「そんなに身構えないで欲しいなぁ」

「誰」

端的に返す、もちろん警戒は解かない。

「う～ん？　誰って聞かれてもなぁ……『迷探偵（めいたんてい）』とでも名乗っておこう」

「探偵？」

「いやいや、迷探偵。迷い、迷わせ、迷い込む。ボクに任せておけば、全ての事件は迷宮入りさ」

それは探偵では無いのでは？

「だから、『迷』探偵。迷い、迷わせ――」

コイツ、心が読めるのか!?

「探偵と言うのは状況を理解し、相手の顔色を探るのが仕事だからね。キミの表情は分かりやすくて助かるよ」

なんだ、驚いて損したよ。

どっちにしろ、事件を解決しない探偵に意味は無い気がするのは、私だけだろうか。

「だから言っているだろう。迷探偵だってね」

「あ～はいはい、その迷探偵様がどうして此処――」

そうだ、どうして此処に居る?

ここは腐っても上空何千メートルの位置に在る筈だ。

そこに侵入してくるにはそれなり以上のモノが必要なはず、まして、ここは変態でもゲイルと言う貴族の屋敷。

生半可な防犯設備だとは思えない。

「まぁ、立ち話も何だし、中に入ろう」

まるで自分の家であるかのように、書庫の中へと入って行く。

怪しすぎる。

私を書庫の中に招き入れて何をするつもりだ。

「キミ、この世界の住人ではないだろう？」

――っ！？

何故、それを知っている。

私は誰にも言って無いはずだ。

「ほら、廊下では都合が悪いだろう？　中に入りたまえよ」

確かに都合が悪い。

廊下では誰に聞かれてもおかしくない。

口封じする人数が増えるのは面倒だし、従う振りをしつつ、隙を窺って――

仕方なく書庫に入り、扉を閉める。

ローブ大好き（後書き）

新キャラです

心躍ります

感想待ってます

バカにされてる気がする

「初めに言っておこう。基本的に、ボクはキミが異世界人だという事を広めるつもりはない」

迷探偵は本の山に腰かけつつそう言った。

身長は低め、年齢は同じぐらいだろうか。

顔は中性的だが、ローブを押し上げる胸の大きさから見て、男性はありえないだろう。

殺る事に、躊躇う理由が無くなった。

「それで、そんな事を言う為にここに来た訳ではないのでしょう？」

「話が早くて助かるね。キミは頭が良いらしい」

何だろう、バカにされてる気がする。

「まず、何故私がキミの事を『識っているのか』って事を説明しよう。そっちの方が、話が速そうだ」

それは是非とも聞いておきたい。

今後、口封じ――――もとい、説得する相手が増えるのは好ましくない。

「ボクは千里眼と心眼、精霊眼や竜王眼を駆使して世界を見てるからね」

おっと、何だろうこの厨二……困ったな。

「おいおい、なんだその痛い人を見る目は、普通はもっと驚くとこ――――ああ、キミは異世界の人だったね」

もしかして、キミの世界では有り触れた物だったのかな？　それとも魔法とかが存在しなかったのかい？　と言う言葉に後者だよと頷く。

「仕方ない、こっちの世界の常識を簡単に説明しよう」

当初の目的だった世界の常識ゲット！

この人怪しい人だけど良い人だったよ。

キミの世界の事は知らないが、という前置きと共に始まる簡単な講義。

この世界では魔法が生活基盤になっている。

魔法とは生まれつきの才能にも左右されるが、基本的には誰にでも使える物。

そして、自称迷探偵は才能の塊。

とってもファンシ……じゃなくて、ファンタジー。

私にも魔法って使えるのかな？

そのあたりも教えてくれると助かるんだけど。

「基本はこのくらい、あとは自分で調べたまえ」

何この役に立たない人。

「ボクがどれだけ説明した所で、キミは全て信じる訳ではないだろう？」

現に今だって、9割は疑っているはずだ。って、何で分かるんだろう。

ああ、探偵だからか。

「それで何故、キミの事が分かるかって話に戻るんだが――」

そうだ、そこが一番重要だ。

「キミの事が、ボクには見えないからさ」

は？

「確かに、肉眼でキミを捉える事は出来る。でもね、魔術的な視点、視界を通した場合、キミの事は分からないんだ」

大事な事なのでもう一回……は？

見せる方が早そうだ。と言いながら、迷探偵の眼の色が次々に変わっていく。

最初は黒だったが、次は赤、緑、青。

カラフルな瞳をお持ちですね。

瞬きする度に代わる瞳の色に、しばし呆然とする私。

「まあ、説明はいいや、面倒だし。今見てもらったのが精霊眼や竜王眼と言った、凡才が１００年努力しても辿り着けない魔術の秘奥、最終形態と言ってもいいかもしれないね」

へぇ～。

スケール大き過ぎて、どう反応すればいいのか分かんねぇや。

「要するに、ボク以外にキミを発見出来る様な人物は居ないって事で大丈夫だよ」

なるほど、分かりやすい。

「そろそろ、その殺気を抑えてくれると助かるんだけど」

――飛びかかる。

右手で真直ぐに頭部を、左手は体で隠しながら腎臓を狙う。

しかし、その手は届くことなく、体ごと見えない空気の壁の様な物で阻まれる。

「さぁ、取引をしよう」

「内容による」

不味い、完全に向こうが有利。

体は宙に浮いた状態で止まってしまった。

そして、相手の表情が真剣な物になったのを見て、これが本題だと理解する。

「キミには、未来を変えて欲しい」

バカにされてる気がする（後書き）

後４話くらいで新章突入

できたらいいなぁ……

ということで、主人公の目的がやっと決まりそうです

3年後、この世界で大きな戦争が起こる。

王国対帝国。

泥沼状態が2年以上続き、勝敗は迷探偵でも分からなかった。

その未来は変わったらしい、私がこの世界に出現した瞬間に。

戦争の早期終結は確定したが、どちらが勝つかは半々。

どうも私が鍵を握っているらしいのだが、詳細は不明。

私は平和に暮らせりゃいいんだけどね。

ってかそろそろ下ろして欲しい。

宙に浮いたままって意外と気持ち悪いし。

「取引の内容は2つ。1つ目、戦争の回避。2つ目、万が一戦争が起こった場合王国側に付く。その代り、キミが元の世界に戻れるよう手を尽くすし、キミが異世界人だと周囲にバレないようにもして

あげよう」

まさか、コイツが私をこの世界に喚んだとか？

その可能性も考えながら考慮しな――

「ちなみに、この取引に乗らないならボクはキミが異世界人だと世界中に言い触らす」

何その脅迫！

「ボクはキミを喚んだ人間たちに心当たりがある。と言うよりも、ほぼ特定できているから」

まずいマズイ拙い不味い。

完全にペースは向こう側。

切れるカードは微塵も存在しない。

「ああ、キミをこの世界に喚んだ理由なんだけどね。たぶん戦争で利用しようとしてるんじゃないかな？」

「そいつらを殺せば、簡単に戦争を回避できるんじゃないの？」

「運命ってのは単純だからこそ、その強制力は半端なモノじゃないんだよ。仮に殺したとしても、他の奴らが戦争を起こすだけさ」

まあ、今のキミには理解できないだろうねと、自嘲気味に囁く。

どっちにしろ巻き込まれるのは確定。

最悪、戦争を回避しようとしてるコイツと手を組んで後悔するか、戦争に参加してから後悔するかの違いでしかない。

「具体的に私は何をすればいいの？」

「今はまだ、何もしなくていいよ」

今はまだ、ね。

「異世界人だとばれない様に生活してくれれば当面は問題ない。ボクはキミが動く事によって変わる未来ってのを楽しませてもらうよ」

なんて性悪。

絶対腹黒いよ、この女。

悪女だよ、まったく。

「交換条件」

「ん？　大抵の事だったら叶えてあげるよ」

「帰る方法の模索と情報の隠蔽以外に、この世界の知識と戦争が起きるって事の証拠を、それから早く下ろして」

ああ、ごめんごめん。と言いつつ魔法（？）が解除される。

さよなら空中、ただいま地面。

「この世界の事ならいくらでも教えてあげよう。それから証拠についてだけど……そうだな、明日からの天気を当てたら信じてくれるかい？」

何そのお天気お姉さん。それぐらいで信じられたら警察要らんわって、こっちの世界だと警察とか居るのかな？　自警団とか騎士団は居そうだけど。

「たかが天気だとバカにしてるだろうけど、これでも完璧に当てられるのはボクぐらいだろうね」

むぅ……

こっちの世界の判断基準がないから何とも言えないな。

「一応伝えておくと、明日から三日間は晴れ、四日目は夕方から雨、五日目の昼まで降り続いて、夕方には晴れるだろうね。六日目、七日目は曇りだけど雨が降る事は無いよ。たまに晴れ間も覗くはずさ」

週間予報か。

確かに完璧に当っていれば凄いとは思うんだけど。

私、売られて何処に行くのか予想も出来ないし。

「まぁ、信じるか信じないかはキミ次第だよ。信じてもらわなくても、無理やり巻き込む事になるだろうからね」

うわぁ、何この人、恐い。

「分かった、協力はする。でも信用はしないから」

どっちにしろ巻き込まれるんだったら、味方だと思わせておいて背後からって手もあるしね。

「それはよかった。ボクも不本意な手は使いたくないからね」

この悪女とはもう一生分の会話した気がしますよ。

一番関わっちゃいけないタイプの人間ですよね、絶対。

面白そうだから（前書き）

2話同時ですので、読んでない方は1話前からお願いします。

面白そうだから

それから私は、この世界の事について聞いて行く。

もちろん、後で自分で調べるけどね。

こっからは長くなったので要点だけまとめようじゃないか。

ああ、このまとめも久しぶりな気がするよ。

体感時間では3年くらい経ってる気がする。

心が安らぐね。

まず、魔法について。

主に帝国が使っている古語（エンシェント・ルーン）。

帝国語の基になったとも言われていて、短い詠唱で大きな効果を発揮するが、魔力消費が大きいのが特徴。

次に王国が使用している魔語（ルーン）。

いろいろ混ぜた結果生まれた一番使い勝手の良い物、呪文や魔法

陣、魔法回路を使用して相乗効果を発揮させるのが特徴。

後は教会が使用している神語（ディオ・ルーン）や精霊が使っているといわれている精霊語（ニンフ・ルーン）、竜が使用しているらしい竜語（ドラゴニス・ルーン）などなど、個人、個別に分けて行くと切りが無いのでメジャーなところだけ紹介しました。

この説明中に、私はどんな言語でも理解でき、話せる事が分かった。

迷探偵には帝国語、王国語の二つが理解できていれば十分とか言われたけど、どっちも日本語に脳内変換され、日本語で話そうとしている私としては、実感がまったくない。

結論、どうでもいい。

次、各国の情勢について。

今は平和そのものって感じらしい。

帝国は静かだし、教会サイドも中立を通している。

王国は内輪で揉める事も無く、寧ろ王がもうすぐ死ぬって分かっているからその関係で忙しいとかなんとか。

その他の小国家も何をするでもなく自国の繁栄に忙しくて他に手を出す余裕がない。

最後、私を巻き込む理由について。

面白そうだから。

はい、本音頂きました。

まあ、それが全てでは無いだろうが、８割は本気だったね。

あの口調だと。

「じゃ、期待してるから」

語るだけ語った迷探偵は、もう帰るらしい。

はいはい、さっさと帰ってくれ、自分の星に――って此処がその星か。

普通に扉から出て行く迷探偵。

ちょっと待て！

扉を開ける。

書庫に入る前と変わらない、静かな廊下。

右、誰も居ない。

左、やっぱり誰も居ない。

そこには迷探偵の影も形も無かった。

何処から来て、何処へ行った。

まあ、また会う事になるんだろうし、今気にしても仕方ないか。

寝よう。今日はもう疲れた。

部屋へ帰る私の足取りは、たぶん異世界に来てから一番重かったと思う。

面白そうだから（後書き）

１万ＰＶ感謝を込めて、二話同時掲載です！

と言ってもこっちの文量は少なめなので、特に何がって訳でも無いです

ただ丁度良く切りが良いので、１万ＰＶに合わせて公開

私、奴隷になりました！

迷惑な探偵との出会いから一夜明けて、運命の日。

晴れたよ、これ以上ない位の快晴ですね。

プチ週間天気予言は当たった。（まだ初日だけどたぶん外れない）

世は祭り日和。そして私の奴隷ライフは絶望日和。

今日から1週間の間に私は売られるらしい。

初日の奴隷市場は調査なんかがメインで、買う人は少ないらしい。

二日目から四日目は個人売買、五日目からはオークション形式で売られて行くとの事。

私はてっきり露店開いて叩き売りとかするのかと思ってたよ。

ゲイルがそんなことしてたら――――完全に変態ですよね、わかります。

ゲイルに知り合いが多く、ゲイルの商品自体も人気で、オークションに商品が並ぶ事は稀で、個人売買でほとんど売れてしまうとかなんとか。

今日一日は城で待機を命じられている。

奴隷の刻印の設定をこの空中屋敷に設定し直し――数秒で設定できていたけど、構造とかどうなってるんだろう――祭りに参加しに行った。

私達も連れてけ～。

って感じに騒ごうかと思ったけど、やめた。

今日は一日寝ていようとベットに横になりゴロゴロしている。

こっちに来てから色んな事が在り過ぎて、頭の中が整理できていない気がする。

まず現状を整理してみよう。

奴隷。

以上！

あれ、どうしてこうなった？

まだ何かあるはず。

変態貴族に軟禁状態。

３年後の戦争（予定）

自称迷探偵のお気に入り。

おかしいな……

私の平穏は何処に行ったんだろう。

これからについては追々考えるとして、落ち着いたら手紙でも書こう。

生みの親では無く、引き取ってくれたお父さんとお母さん宛てに。

壊れかけていた私を引き取って、此処まで育ててくれた両親。

一人暮らしをしたいって我儘まで叶えてくれたんだ。

きっと心配……はしてないだろうけど。

届くかは果てしなく不安だけど――

迷探偵にでも頼めば何とかしてくれそうな気がする。

次に会うのはそう遠くない予感もあるし、その時にでも頼めばいい。

書きだしは、そうだな――

私、奴隷になりました！

私、奴隷になりました！（後書き）

第1部　～完～

次回作に（ｒｙ

いえ、まだ続きますけどね

次は閑話をちょっと入れて、第2部始めたいと思います

閑話では視点が違えば主役級
作者が違えばきっと主役のあの人たちが活躍する

予定

迷探偵の裏話

真下に見えるのは先程まで会話していた少女の頭部。

右を確認、誰も居ないね。

左を確認、まあ、誰もいないだろうね。

ボク、上に居るから。

流石に上下までは確認せず――確認する奴がいたら見てみたいモノだけどね――疲れ切った様子で、自室に帰って行く。

これから楽しくなりそうだよ。

あの娘を発見出来たのは本当に偶ぜ――いや、まあ、なんて言うんだろうね。

ちょっととある人物を観察（ストーキング）してたら、偶々見つけたっていうかね。

暇潰し兼八つ当たり兼気分転換に、彼を千里眼で追っていたら、彼が回収した女の子が誰も居ない空間と楽しそうに喋っているじゃないか。

最初は頭おかしいんじゃないの？

とか思ったりもしてたけど、彼ですら誰も居ない空間に語り出す始末。

流石にボクの頭がおかしくなったんじゃないかってヒヤヒヤしたモノだ。

過去視や千里眼をフル活用して得た事実。

帝国側が実験していた召喚術。

アレが成功していたらしい。

帝国側も、ボクでさえも失敗したと思いこんでいた大規模召喚魔法。

街一つを全て犠牲にした胸糞悪い実験だった。

当然、失敗した研究員達は既に処分されているし、実験そのものも凍結され、世間には疫病が発生して街が壊滅したと公表されている。

召喚された彼女は、既に追われる理由が無くなっているなんて、思ってもいないだろう。

さっき話してみた異世界人の少女。

中々頭も回る。

勘も良い。

なんとかこっちの手札を見せずに協力体制は敷けたけど、裏を見れば嘘八百。

人はボクを迷探偵と呼びますから。

事実を巧妙に隠しつつ、さも事実であるようにでっち上げる。

僕の得意技でもある。

戦争？　何それ知らな～い。

大体、ボクが未来を予知できるのは二年先が限界だし、大勢の人に係わる事しか視る事が出来ない。

それでも十分凄い事ではあるけど。

祭りの時期で助かった。

丁度王都で建国記念祭やっていてくれたおかげで、信用してもらえる様な話に運ぶことができた。

あの少女、サヤ＝ムラサメだったっけ？

帝国側に渡すのは勿体無い。

帝国になんか渡したら、実験観察以下略の未来しか予想出来ないしね。

まあ、それなりに頭は回る方だったし、ボクが王国側の人間だって勝手に推測してくれているだろう。

ボクが王国側だと推測すれば、帝国が彼女を喚んだって正解まで至るのはそう難しくない。

そうなる様に誘導もしておいた。

これで帝国に近づくようなバカなら、それはそれで楽しめそうだ。

彼女と会えるのは、ボクの未来視が完璧なら最短でも一年後。

彼女がその未来をどれだけ変えるのかは予想出来ないし、視る事も出来ない。

それまでは気長に待とうじゃないか。

そう言えば彼女との契約。

戦争回避に協力してくれる代わりに、元の世界に返す方法を探す。

元々戦争なんて起きやしない。

なら、彼女との約束を守る必要も無い。

まあ、喚ぶのに街一つ犠牲にしているのだ、返すのにも同じだけの犠牲が必要だと知れば諦めるだろう。

余程の鬼畜では無い限りね。

事実、喚び方は分かっているんだ、それを反転させればいいだけの話。

召喚呪文と召喚式は既に手元に在るから、半年も使えば返還の基礎は出来上がるだろうし、さらに二ヶ月もあれば返還ぐらい余裕だろう。

その為に、街一つ、千人ほどを犠牲にする事になるだろうけどね。

ああ、楽しみだなぁ。

未来が分からない感覚って言うのは久しぶりだよ。

これが人生。

これぞ人生。

人生を楽しむ為に、まずはそうだな――

この国の王子、彼をからかいに行こう。

迷探偵の裏話（後書き）

あらすじでも書いてある通り
ただ売られ売られゆく話です

戦争？　何それ知らな～い

ってな訳でここでネタばらしですね

作者は戦闘描写が苦手です
戦争？　無理です
多人数　長期間とか
マジで無理です

なんだったんだろうな、あの女は。

いきなり攻撃を仕掛けてきたかと思えば、不意撃ちだったとは言え、簡単に無力化される。

アイリスを狙って来た刺客かと思い、魔法で記憶を覗こうとしても上手くは行かなかった。

仕方なく奴隷の刻印で行動を制限すれば、何の抵抗も無く、王都までたどり着いてしまい、最後に王との面会にも連れて行ったのだが、特に問題も起こさなかった。

流石に俺の勘違いだったか。

少し罪悪感があるが、ムラサメにも問題があったのだし、俺の商品が手荒な扱いを受けるとは考え難い。

「やあ！　遊びに来たよ～」

一息付いている所に、一番厄介な奴がきやがった。

「何だいその顔は、とっても嬉しそうじゃないか」

「迷惑そうな顔だ！　大体、朝はおはようだろうが」

シャルティア＝ローレライ、学園最強の魔法使いにして俺と同期であり、自称迷探偵の情報屋。

人は彼女を魔女と呼ぶ。

いつの間にか仲良くなっていたのだが、俺にとっては迷惑でしかない。

年齢は俺でも知らない。

確かアレは、出会って間もない頃だったと思う。

つい口を滑らせた俺は、気が付いたら病院に居た。

何を言っているのか分からないと思う。

俺も何があったのかが分からない。

ただ一つ『年齢を聞いた気がする』という、漠然とした記憶だけが頭に残っている。

「なら言い直そうじゃないか、おはよう、ゲイル」

「ああ、おはよう」

祭の最中に顔を出したと思ったら、それから今日までずっと居座ってやがる迷惑な友人だ。

流石に、その生活も今日で終わりなのだ。

「帝国の召喚実験の話だが――」

「またその話かい？　朝から血なまぐさい話はよしてくれよ」

「その後の帝国の動きについて――」

「その事はもう話しただろう？　ボクは何も知らないよ」

コイツが知らない訳が無い。

むしろ、コイツは知らない事の方が少ない。

「黒龍を召喚して使役しようとして失敗。犠牲は約千人。生存者は皆無」

ここまでは簡単に調べる事ができた。

此方も事後処理や情報整理と忙しいのだ。

必要な時には居ない癖に、不必要な時には隣に居るシャルティアを睨みつける。

「へ～、良く調べたね。ボクは全く知らなかったよ」

「意見を聞かせろ」

俺が真面目になったのを見て、シャルティアも真面目な顔になる。

「そろそろ出発しないと遅刻するよ？」

「何を言っている。今日はいつもより早く――――」

アイリスの事を忘れていた事を思い出し、急ぎ準備を整える。

窓から顔を出し、後ろ姿に向かって叫ぶ。

「シャルティア、話は後で聞かせてもらうからな！」

「覚えてたらね～」

悠々と歩いて屋敷を出て行くシャルティアを見送り、妹の部屋の前で立ち止まり――

王子の憂鬱（後書き）

祭から1週間くらい経過してます。

アイリスの新学期

元気に暮らしてると良いな。

巻き込んでしまった少女。

わたしの所為で奴隷になってしまった女の子（サヤ）。

木の上から声をかけられたと思ったら、いきなり飛び降りて奴隷商人――――これはわたしの勘違いでしたが――――を次々に倒して、それはもうカッコ良かったです。

男の子だったら惚れていたかもしれません。

ああ、でも、わたしにはフィンが――――

赤面しているのが、自分でも分かるくらいに顔が熱い。

サヤは最初、ぎこちなく喋っていましたが、いつの間にか、王国標準語であるリスフェル語を流暢に話すようになっていました。

不思議な事もある物です。

王都に付く頃にはすっかり仲良くなって、フィンの事まで話してしまいました。

サヤが居なければ、わたしは心細くて死んでいたかもしれません。

とっても仲良くなったけど、今でも信じられない事が一つあります。

サヤの年齢です。

聞けば、サヤはわたしの一個上らしいのですが、如何見ても、何処から見ても、誰が見ても年下にしか見えませんでした。

でも、言葉の端々や時折見せる大人びた表情、何よりその気遣いに年上感が伺えました。

お姉ちゃんが居たらこんな感じかもしれません。

理想のお姉ちゃんです。

残念な事に、わたしは一人っ子ですが、あんな人がお姉ちゃんだったら幸せだろう事は想像に難くありません。

トントントン。

「はい、どうぞ」

ドアを叩く音に、反射的に返事を返します。

「今日から学園だろう？　寝過ごしていないか確認しに来た」

「大丈夫です」

今、わたしは学園の制服を身に付けています。

とっても服に着られている感じがして、似合っていないのが自分でも分かります。

「開けて大丈夫か？」

「はい、どうぞ」

ドアを開け現れたのは、義母兄妹であるゲイル兄さん。

ゲイル兄さんも同じ学園の制服に身を包んでいて、わたしより一学年上の生徒だそうです。

今までは長期休暇中だったそうで、今日から新学期。

ゲイル兄さんとはそれなりに仲良くなり、学園に知り合いが一人でも居るのは、とても心強くて助かります。

普通なら、もっと仲が悪くなってもおかしくないと思うのですが、とても良くして頂いて、わたしの方が萎縮してしまいます。

堂々としていて、それでいて嫌味を感じさせない態度。

もっと普通でいいんです。

わたしは普通に生きて行きたいんです。

「朝食を食べたら出るぞ、ちょっと早い気もするが、教務室にも顔出さないとダメだろうしな」

「はい」

サヤは売られて、セントリア貿易都市に行ってしまい、一年は帰って来ないそうです。

わたしはわたしで、この一年間はとてつもなく波乱の予感しかしませんが、頑張るしかありません！

まずやるべきことは――――

ぐ～

この鳴いているお腹を満足させる事！

アイリスの新学期（後書き）

次回から新章突入ですよ
奴隷生活編　～そのバナナを私に寄こせ！（仮）～
お楽しみに！

第一部までの設定（荒）（前書き）

作者が覚えておけばいい程度の設定です
ぶっちゃけ荒が多すぎてどうしようもない状態
読まなくても全くストーリーには関係ありません

※　ネタバレはたぶん含みません

第一部までの設定（荒）

村雨沙耶　（サヤ＝ムラサメ）
年齢　１７歳
性別　女性
身長　１６０くらい

無銘流と呼ばれる武道の本家に生まれた落ちこぼれ
天才の妹と秀才の兄を持つ
黒髪ロング　ツリ眼　ツルペタ　童顔
徒歩３０秒で行けるコンビニへポテチとコーラを買いに行った帰り道で異世界へご招待
所持品はポテチとコーラ
スウェットは脅威の着衣

一言コメント
「要点は任せろ」

アイリス
年齢　１５歳
性別　女性
身長　１６０

辺境の村から連れてこられた王様の隠し子
フィンと言うちょっと気になる異性の存在が心の拠り所
ふわふわ金髪ロング
ボイン

一言コメント
「わ、私そんなに胸大きくありません！」

ゲイル　（ゲイル＝シュタットフェルド＝ファイン＝リースフェル）
年齢　１７歳
性別　男
身長　１７０

国王の息子
魔術の腕前は学園上位
主人公属性すぎて作者が忘れなければきっとまた出てきます
詳細は不明

一言コメント
「国王と似てる？　吐き気がする」

シャルティア＝ローレライ
年齢　１８歳
性別　女
身長　１６５

自称迷探偵
魔術の腕前は学園一位の実力者
学園外でもその腕前は上位
嘘を真実と偽る詐欺の才能も世界トップクラス

一言コメント
「ボクに任せておけば、全ての事実は迷宮入りさ」

国王
性別　男

ジジイ
白髭
以下詳細は不明（明かされる事も無いと思います）

フィン
性別　男

アイリスのちょっと気になるお相手らしい
ちょっと頼りない感じでも、男らしいところがあるとかないとか

（爆ぜればいいのに……）

王立魔術学園
名門中の名門
卒業生はエリート街道

神
この世界の神とは別に、主人公の頭の中にだけ存在する。
力が欲しいか？　と言う問を投げかけては来るが、実際に与えられる事は皆無
ハッキリ言って役に立たない。

神子
主人公の頭の中に居る神とは別の神を信仰している教会に祭り上げられた生贄
詳細は不明（物語に関係してくるかも不明）

聖女
名前は出したけど扱いに困るビックネーム
詳細は不明（勢いで出したものの不明）

無銘流
戦国時代から続いているといわれている
領主を失い落ちぶれた武芸者が集まって出来た流派
名前の由来は、どんな武器でも扱っていたことから、鍛冶屋の駄作でさえも扱うのでは？　と言う噂が広がったのが始まり。
明治以降は外国の武器、武術なども取り込み、海外にも分家がある。
本家の影響力は皆無ではあるが、分家には政界にもコネがあったりする。

古語
帝国が使っているらしい魔術言語

魔語
王国が主に使用している魔術言語

神語
教会が使っているらしい魔術言語
（教会が出てくるのは早くても第三部）

精霊語
精霊が使っているらしい魔術言語
（精霊が出てくるかは不明）

竜語
竜が使っている魔術言語
（物語に竜を出せるかは不明）

ポテチ
某有名メーカーのポテチ
味はのり塩
コの方かカの方かは想像に任せます

コーラ
某有名メーカーのコーラ
赤い方か青い方か聞かれれば
作者は赤い方が好きです

第一部までの設定（荒）（後書き）

ネタバレ等あったら指摘してください
削除しますので、ええ
たぶん含んでないとは思いますが
感想とかはいつでも待ってます

走馬灯のように飛んで行く

「はぁ……ハァ……ふ～、は――――」

感覚を澄ませる。

奴の気配は無い。

「ハァハァハァハァ――――」

「何時まで負け犬の様な呼吸を繰り返しているんですか旦那様？」

「ハァハァ……スー――――はぁハァハァはぁ――――」

ダメそうだな。

『何処へ行ったのだ異界の者よ！　正々堂々我と戦うのだ！』

遠くから叫び声が聞こえてくる。

地下都市の中を反射してくる声の元を辿る事は不可能に近いだろう。

「ほらほら、呼ばれていますよ旦那様」

「僕は……生れも。育ちも。セントリアだよ……イカイという都市も、村も――――記憶には無い……筈だよ」

まあ、呼ばれているのは、たぶん私だから当たり前か。

「さ、そろそろ行きますよ旦那様」

「そろそろ……許してくれない？」

「何を仰っているのか理解できかねます、旦那様」

「だから、その……」

「そうですね」

俯いていた顔が、希望に満ちた顔になる。

しかし――――

「偶然ですよね。勇者の墓を荒らす事になったのも、その勇者が私達を襲ったのも、たとえその勇者を起こしたのが『旦那様』であったとしても――――今のこの状況は偶然ですよね。分かっていますよ、『旦那様』？」

私の言葉の数々によって、希望に満ちた顔は段々と下げられ、ついには地面に到達する一歩手前状態。

私から見ると土下座に見える。

「どうでもいい事は置いてって下さい。走りますよ」

走りだし、周囲を確認。

幸い、勇者は追いついて来る気配も無い。

そう、勇者である。

私達を追ってきている。

私個人を追ってきている。

勇者。もっと言うなら初代勇者。

初代勇者　ＶＳ　奴隷少女

どうしてこうなった……

ハッキリ言って比べるまでも無い勝敗。

今、手を引っ張って連れて走っている役立……もとい、足手、じゃなくて、旦那様を捨てて行ったとしても――勿体ないので囮に使うとしても――勝てる見込みは1割以下だろう。

それ以前に、奴隷の刻印があるので、旦那様が死ねばきっと私も死ぬ……

「この変態御主人！！」

「僕は何で罵倒されたのか、詳しく説明を要求する！」

意外と余裕あるな……本当に捨てて行こうかと、ちょっと邪な思考が割って入――

ゴバァッッ！！！！！！！

突然、前方に見えていた曲がり角で、派手な音と、砂煙が上がる。

『おお、此処に居たのか、異界の者よ』

砂煙を振り払いながら現れる勇者。

此処で勇者に割って入られても困ります。

これは、遺書でも書いとけば良か――

反射的に身を逸らす。

ヒュッン――

――ドンッ

耳元を通過して行ったと思われる『何か』は遥か後方。

暗くて確認できない様な場所で音を立てる。

冷たい汗が首筋を伝う。

『ふむ、やはり久しぶりだと感覚が鈍っている様だ。手加減出来ぬかもしれぬが許せ』

いやいやいや、手加減とかされても死にます。

私はただの奴隷少女ですから！

「サ――「さようなら、良い人生だった」って諦めるの早いっ――」

ズンッ――――

「ぐ――――――ッッ」

咄嗟に飛んで威力を軽減させたが、相当なダメージ。

景色が随分早く前に向かって飛んで行く。

いや、私が後ろに向かって飛んでいるだけか。

まるで走馬灯のよ――――

「ッッッガハ――――」

痛みと衝撃に顔を歪める。

結構な距離を飛ばされたらしい。

随分飛んでいた気がする。

意識が朦朧(もうろう)として、家族の事が浮かんでは消えていく。

妹、兄、義父、義母、親戚の人たち。

此方の世界に来てからの事。

アイリス、ローブの変態ゲイル、国王、城下町の人た――

まって、待って、ウェイト、ストップ！

これ本物の走馬灯だよね！　冗談じゃなく、絶対そうだよね！！

走馬灯留まる事を知らず、遂には此処に来る前、売られた所へと辿り着いて――

複雑な感じ

「戦闘に自信のある者は1歩前に出ろ」

ゲイルの言葉に一歩前に出る。

今は個人売買の真っ最中。

嘘付くとまたあの不快感が襲ってくるので嘘は付けない。

試したからちょっと気持ち悪い。

「コレで良いか？」

私を指刺しつつ、隣に居る貴族に聞くゲイル。

あれ？

周囲を確認すると、私だけ一歩だけ前に出た状態。

こんなの、絶対おかしいよ！

「君が戦闘？　ゲイルさん、疑っている訳じゃないんだが――」

ま、見た目１〇歳に見えるらしい私の容姿だと、戦闘（笑）ですよね。

「あれでも俺の近衛騎士５人を簡単に倒したぞ。まあ、こっちも油断していた所はあると思うがな」

え？　近衛騎士？

そんなの倒した覚え――――ああ！！　あの山賊風の人たちか。

アレで近衛って……もうちょっと人選ぼうよ、変態貴族。

商談が進む中、半分以下に減った奴隷たちに目を向ける。

今は祭の四日目、今日も快晴。

天気予言は二日目も、三日目も当たってた。

これで夕方から雨が降り始めれば信じてもいいかもしれない。

ゲイルの言っていた事は本当らしく、あれよあれよと奴隷は売れて行くのだが、私はまだ売れていない。

やはり礼儀が一番重要視されるらしく、家事全般はできる物を他に雇えば良いだけなので、今年は売れないと思う。

「料理は――――」

「コイツなら――――」

売れるのはあまり嬉しくないのだが、売れ残っているというのもなんか納得いかないというか、寂しいというか。

複雑な感じですよ、ええ。

「いくらなら――――」

「出来れば――――」

予言が当たっているのなら戦争に巻き込まれるのは確定。

迷探偵を信用して良いモノかどうか……

「おい！　ムラサメ、こっちに来い」

「あ、はい」

呼び声に上の空で答え、ゲイルの元へと歩いて行く。

「これから契約権の譲渡を行なう。少し痛みが走るが我慢しろ」

え？

左手の甲の刻印が光り出す。

わぁ、何か綺れ――――って痛っ！！

刺す様な痛みの後、刻印は元に戻る。

ああ、やっぱり消えるとかそんな訳ないですよね、分かってましたよ。

って言うか私売れたの？

変態一歩手前

「今日からサイモンさんがお前の契約主になる。自己紹介しとけ」

「サヤ＝ムラサメです。よろしくお願いします」

部屋へと移動して細かい契約内容確認中です。

新しい契約主は、見た目優男。

金髪金眼、イケメン、態度って言うか、雰囲気が軽い。

身長も高めで……死ねばいいのに。

「僕はサイモン＝バッティーク、これからよろしく」

別に貴方の名前なんて聞いてないです～。

どうせこの人も旦那様とかご主人さまって呼ばれて悦ぶ――――もとい、喜ぶ人種だろう。

人はそれを変態と呼ぶらしいよ。

あ～、テンション上がんね～。

まあ、自分が売られているのに、テンション上がるってのもおかしな話だけど。

「では今日の夕方には――」

「ええ、時間もギリギリで――」

気分はドナドナ。

歌は知らないけど意味は知ってる。

子猫が売られていく話だよね！

別に自分の事を子猫ちゃんって呼んで貰いたい訳じゃないよ。

本当だからな！

大体子猫ちゃんとか、年齢的に無理があるって言うか、ああ、でもこっちだとちょっとだけ若く勘違いされて――

「盗賊には気を付け――」

「その為に――」

あ、何か今フラグが立った気がする。

話聞いてなかったけど……

「では旅の支度もありますので、これで失礼させて頂きます」

「またのご利用、お待ちしておりますよ」

「はは、そこまで奴隷は必要としてないが、何かあったらよろしく頼みます」

話し合いと言う名の雑談が終わったところで二人が腰をあげる。

「ムラサメ、旅の準備を手伝ってくれるかい？」

「ええ、ご主人さまの命令とあらば」

「……」

え、何その微妙な表情。

なんか悦んでいるけど、素直に喜べないみたいな。

「えーっと……僕の事はサイモンかバックティークって呼んでくれればいいよ。家に付けば妻と子どもが居るから、名前で呼んでくれた方がいい」

なんだ、ご主人さまはダメか、そうですか。

いきなり名前はハードル高いな。

「はい、サイモン様」

「――――様もいらない。出来れば呼び捨てで、もしくは『さん』付けで、僕が変な趣味に目覚めそうだ」

変態だと思ってたけど、実は変態一歩手前ってアレですね。

でも奥さんと子供さんか。

仲良くなれと良いな。

ちょっとだけテンションを上げつつ。

回れないと思っていた祭りの街並みを楽しみながら。

旅支度を手伝った。

途中。

自ら売られていく準備をしているようでテンションが下がったのは言うまでも無い。

変態一歩手前（後書き）

設定集もアップしました
読んでも意味はありませんが
読んでくれると嬉しいかと思います

チェックイン

雨だ。

日が傾くにつれて天気が悪くなってきていたのだが、ついに振って来た。

これで天気予言は多分信じて良い。

問題は――

今、馬車で移送中って事だよ。

何を？　私を。

旅の準備が出来るなり、すぐに出発すると告げられ。

他にもサイモンさんと同じ方向へ向かう人たちと合流し、今は結構な人数での移動になっている。

え？

それより迷探偵の事？

戦争の事？

まあ、その内なんとかなるでしょ。

考えても仕方ない、気楽に行こう。

「サヤ！　こっちを手伝ってくれ！」

「はい！」

振って来た雨は酷く、幌に穴が開いていたりすると、中の商品が傷んでしまう原因にもなるので、そのチェックと補修を行っている。

地面が泥濘始めているので、馬車も速度は出さず、少し先の雨避けが在る処まで走って今日は休むらしい。

手先はそれなりに器用である私にとって、布を当てて縫う程度の補修は朝飯前なんだぜ。

「終わりました！」

「よし、今はこれで良いだろう。幌の中に戻って休んでくれ」

とりあえずサイモンさんの荷馬車を探す。

「おーい、ムラサメさん、こっちだ！」

声のした方を向くと、サイモンさんが手を振って呼んでいる。

駆け寄り、幌の中にチェックイン。

気分は奴隷にチェックイン。

「大体終わったのかい？」

「ええ、終わりましたからこっちを向かないでくださいね、サイモンさん」

現在着ているのはメイド服でもスウェットでも無く、私服である。

サイモンさんが気を利かせてくれたのか、それともメイド服が気に入らなかったのかは判断が難しい所ではあるけれど、買って貰いましたよ。

この世界の標準装備。

ワンピースタイプで、ちょっと眺め――――もとい、膝下まである長めのスカート。

上は羽織る様にチェックのカーディガンっぽい物を。

合計３セット。

買って貰ったばかりのその服が濡れた所為で所々透けて、下着（特にブラ）や肌が見えてしまっている。

「え？　どうし――――」

「振り返るな変態御主人！」

流石変態。

隙あらばラッキースケベを狙いつつ、女性の艶姿を見ようとする。

なんとか幌の除き穴を塞ぎサイモンさんの視界を遮る事に成功。

「そろそろ目的地ですよ。前を見て安全運転でお願いしますね」

出来ればご主人さまには豚箱にチェックインしてもらいたい。

急には止まれない

雨以外は何事も無く旅は進み、目的地はもう目と鼻の先。

後半日も行けば――

「そう言えば、サイモンさんの家ってどこにあるんですか？」

「あれ？　言って無かったっけ。セントリア貿易都市の住宅街さ」

セントリア貿易都市か、食材には事欠かないとありがたい。

「どんな街なんですか？」

「う～ん……どんな街か、まず賑やか、次に雑多ってところかな」

いつもは気にしてないから、よく分からないやと笑顔で応えるサイモンさんに、楽しそうな街なんだな～と何となく思う。

出身地の事なんて、住んでる人よりも他所の人の方が詳しかったりするし、私だって日本の事を聞かれても上手く答えられる自信が無い。

着いてからのお楽しみって事で、まずは奥さんと子供さんと仲良くならなければ！

「盗賊だ！」

声自体は後方から、そして、それを聞いた全員の行動は早かった。

「用心棒の冒険者は後方に回れ！　他は全速力で逃げるぞ！！」

このキャラバンのリーダー的な存在の商人が命令を出し、それを聞く前に馬車の操縦者は馬へ鞭を入れている。

「サイモンさん――――」

「大丈夫だよ、こう言う時の為に冒険者だって雇ってるんだから」

ああ、いえ、その事は心配してないんですけどね。

ああ、サイモンさんも他に漏れず、馬に鞭入れて走りだしちゃってるし。

馬車は加速しながら、前を行く馬車に付いて行く。

たぶん――――

「っ――――うわぁ！！！」

馬車は急には止まれない。

前の馬車の後ろギリギリで急停車。

まあ、戦術でも、戦略ともいえない様な策だよね。

後ろで声を上げさせる。

たぶん結構な人数で攻めて来たんだろう。

前で待ち伏せる。

此処は森の中の一本道だし、先回りするのも、この辺りを把握していれば難しくは無いだろう。

面倒な事になったなぁ。

空気が固まった

「全員馬車から降りろ！」

「ぐずぐずするな！　殺されてぇのか！！」

「金目のモノは馬車に置いて行けよ！！」

盗賊さん達、やりたい放題ですね。

私もあんな風に、自由に生きたい。

『人質を助けましょう！』

（キミは天使かい？　久しぶりだね）

『げへへへ、そんな事より、この隙に逃げちまおうぜ』

（悪魔め、そんな誘惑には負けないからな）

『そうです。逃げたとしても奴隷の刻印があって遠くまで行けませんから！』

（あれ？　天使さんそれフォローになってないですよ）

「全員集まったか！？」

「まだこっちに居るぞ！」

「こっちに連れて来い！」

盗賊による蹂躙は終わる気配も無い。

たぶん最後は皆殺しってオチじゃないだろうか。

『もう面倒だ、全員殺しちまえばいいじゃねぇか』

（悪魔らしい意見だな、一考に値する）

『ダメです！　そんな事は悪魔が許しても天使が許しません！！』

（ほう、それならもっと良い意見でも言って貰おうか天使）

『そうですね、天使に良い考えがあります！』

『どうせ、大した意見じゃ――――』

『盗賊のボスを人質に取って逃げましょう！』

（それだ！）

『お前、悪魔より悪魔らしい素晴らしい意見だぜ』

『ふふふ、天使をもっと崇めなさい、奉りなさい』

脳内会議での結論は出た。

後は行動に移すだけ。

サイモンさんは運よく近くに居る。

盗賊は見えているだけで6人

ボスはあの厳つい奴だろう。

こまごまと命令や出したり、報告を聞いているから重要人物なのは間違いない。

盗賊はロープを出して来て、端から縛り始めている。

「サイモンさん、合図を出したら馬車に逃げ込んでください」

「え……？」

戸惑いの声。

サイモンさんが理解したかは確認できないが、時間が無い。

盗賊が近くによって来る。

「キャー　タスケテ　ゴシュジンサマー！！！」

大声を出しながらサイモンさんの後ろに隠れるように移動する。

空気が、固まった気がした。

『『ダメだコイツ』』

うるさいぞ、天使と悪魔！

「おい！　ふざけてんの――――」

「馬車へ」

サイモンさんに合図を出し、近寄ってきた盗賊の一人の喉を潰す。

「――――っ！！」

盗賊が持っていた剣を奪い、ボスの方へと猛ダッシュ。

このまま盗賊殲滅とか、多勢に無勢は無理。

狙うは敵将ただ一人！

「そいつを殺せっ！！」

ボスが大声で怒鳴りつけるが、間に合いそうなのは一人くらい。

部下が剣を構えているが、走った勢いを殺さず、ボスの前に立ちはだかる部下の腹部へ剣を突き立てる。

剣を抜いている暇は無い。

抜くのにも時間がかかるし、剣自体も結構な粗悪品っぽいので、刃毀れしているだろう。

その部下が持っていた剣を拝借。

ボスが剣を構えるが、遅すぎる。

構えようとした右手の手首を掴みそのまま捻りあげ、背後から首筋に剣を突き付ける。

「全員動くな!!」

私の声に、その場の全員が止まる。

いやいや、サイモンさん達は動いてていいのに、なぜ止った。

っていうか馬車に逃げ込めって言っといたのに、縛られた人のロープ解こうとしてますよ。

正義感あふれる良い人ですね。

『誰かさんと違ってな』

(黙れ、皆殺しにしようとした悪魔に言われたくないよ)

『まったく、これではどちらが悪役か分かりません』

（お前の案を採用したんだよ、天使！）

「動かないでください。手元が狂いますから」

ボスが落とした剣を何とか拾おうと足掻いているので、それを嗜める。

「貴方がこの盗賊団のボスですよね？」

「だったらどうした、てめぇは騎士団だとでも名乗るのか？」

「いえいえ、私は普通の奴隷です。かよわい乙女ですよ」

あ、何だろう。

自分で言ってといてなんだけど、鳥肌が立った。

「部下達に指示して下さい。私達が逃げられれば、貴方を解放しますから」

「そんなこ――――っ！！」

首筋に当てていた剣を少しだけ、薄皮だけ切れるように動かす。

「早くしないと、体と首がさようならしちゃいますから」

「お、おい、てめぇら！　逃がしてやれ！」

「サイモンさん達はさっさと逃げる準備して下さい！　何時まで固まっている気ですか」

まだ固まっているサイモンさん達一同に対して、さっさと動くように命令。

バカなの？　死にたいの？　私は美味しい物が食べたいよ！

盗賊たちにも紐を解くのを手伝わせ、馬車に全員乗り込んだところで、縛りつけたボスの塊と、私が馬車へと乗り込む。

「ある程度の距離を行った時点で、お頭さん解放しますから」

回収を願いしますね。と言うと同時に馬車が走りだす。

私は普通の奴隷です（後書き）

評価してくださった方
ありがとうございます。

感想とか指摘とか
いつでも受付中です

悪魔よりも悪魔らしく（前書き）

ちょっとグロ？　入ってます

悪魔よりも悪魔らしく

疲れた。

なんとかなって助かったよ。

さて、コイツをどうするか。

サイモンさんに聞いてみるのが一番だな。

「サイモンさん」

「え？　なんだい！？」

若干声が上擦っているのは気のせいだろうか？　気のせいだと思っておこう。

「コイツどうします？」

指を刺した先には肉の――――もとい、盗賊のお頭の縛り。

「どうするって、解放するんじゃないのかい？」

「え？」

「え？」

……。

「……」

「ああ！　そんな事も言いましたね、私」

いやいや、すっかり忘れてましたよ。

そう言えば、そんな約束もしましたね。

「君は一体どうするつもりだったんだ……」

「普通に騎士団みたいなところに突き出すとか、このまま首を刎ねて捨てて行くとかですね♪」

「可愛く言っても言っている事が物騒過ぎる！」

『コイツの方がよっぽど悪魔だった……』

『天使もまだまだ修行が足りませんでした……』

（悪魔で結構、命は一つ。天使は何の修行をする気だ）

「約束通り解放してあげてくれ。盗賊連中これ以上怨まれたくないからな」

もう十分怨まれている気がします。

さてどうしよう。

命令だし、逃がすのは仕方無い。

そうだ！

取り出したるは先程の剣。

突き刺し刺さる、盗賊の足。

「あぎゅあああああああああああああああああああああ」

叫び声をあげるが関係ない。

両手両足に穴をあけて馬車の荷台から蹴り落とす。

動脈とかは傷つけないようにしたから出血多量で死ぬ事は無いだろう。

『『コイツ悪魔だ！！』』

「ム、ムラサメさん？　いくらなんでも、やりす――」

「これで二度と悪さは出来ませんね、ご主人さま！」

何か言いたそうだったサイモンさんを笑顔の返答でやり込める。

てめぇの事は絶対忘れねぇ！！　地の果てまで追って行って殺るからな！！　覚えてろこんちきしょおおおおおおおおお！！！

何か叫び声が聞こえる。

何この心霊現象、恐い。

その後は何事も無くセントリアに着きましたよ。

盗賊に襲われた事によって、冒険者が数名、商人が1名行方不明なっているが、たぶん死んでいるだろうと、捜索隊は結成されなかった。

悪魔よりも悪魔らしく（後書き）

感想　指摘　待ってます

オレオレ詐欺

お役所から解放されたのが夕方頃。

荷物への被害や事情聴取、怪我人の救護なんかで時間を取られてしまった。

「いや～、やっと解放されましたねサイモンさん」

お役所仕事は何処(いせかい)でも変わらず、遅くて仕方が無い。

退屈だった、暇だった、眠い。

「この辺りだと盗賊も居づらくて住み着かなかったんだが、何かあったんだろうか？」

「へぇ～、この辺って平和なんですね」

「ああ、このセントリア貿易都市には東西南北の商人や旅人、その人達が雇う傭兵や冒険者が多く集まるんだよ。下手に馬車を襲えば傭兵しか載っていませんでしたって事になりかねないからね」

それは悲惨すぎる。

今回は私が乗っていたから良かったものの、いや、悪かったのかな？

「一先ず僕の家に向かおう、ラミアとサラが待ってる筈だからね」

ラミアさんがサイモンさんの奥さんで、サラがお子さん。

大丈夫、私なら仲良くなれる。

家の前に着く、やばい、緊張して来たよどうすたらいい！？

何か日本語怪しい気がするけどどうすたらいい！？

サイモンさんはチャイムを押して――

「今帰ったぞ！」

普通にドアを開けようとしてドアにぶつかった。

間抜けすぎませんか。

「お、おかしいな？　何時もならドアが開いて――」

「どなたさまですか!?」

家の中から声が聞こえる。

お子さんだろうか？

「サラ！　パパだよ、サイモンパパが今帰ったぞ！」

やはりお子さんらしいが、パパって、サイモンパパって……ダメだ、笑っちゃいけない。

「今お母様が出かけているので、帰っていただけますか？」

「だからパパが帰って来たんだ。せめて扉を開けてお話しよう！」

「誰も家に入れるなとお母様に言われていますので、オレオレ詐欺とかやめていただけますか？」

なんだろう。

現代の嫌われているお父さんの図が此処に在るよ……

って言うかこっちにもあるのか、オレオレ詐欺。

「――あら、サイモン。お帰りなさい」

振り向くと、偉い美人がそこに居ましたよ。

美人、短い青髪、金眼。

まるで物語の中の人魚の様な姿に目を奪われる。

「ただいま、ラミア」

ラミアさん!?

まて、この美女がラミアさん!?　いえ、もうラミア様と呼ばせて下さい。

「今回はまた、長い出張でしたね」

「それより大変なんだよ。サラが反抗期に入ったのかお父さんの言う事を聞いてくれないんだ」

「あらあら、そんなのはいつもの事でしょう?」

「待ってくれ、その認識はおかしくないか!?」

「ほらほら、こちらの可愛いお客さんをわたしに紹介して下さいな」

「ああ、今日から雇う事になった――」

「わたしはラミアと言います。こんな所で立ち話も何ですから、どうぞ中に入って下さい」

「はじめまして、サヤ＝ムラサメです」

マイペースな奥さんだ。

中からドアを開けてもらい、中へと招き入れる姿は優雅なんだけど、なんだろう、入ったら二度と出れない様な気がする。

「待ってくれ！　僕の話は無視な――」

「何も無い家ですけど、ゆっくりしていって下さいね」

後ろ手にドアを閉めるラミア様。

その手が素早く鍵を閉めたのはきっと気のせい、そう、私の勘違いだと思いたい。

「待って！　僕も中に――」

ドンドンドン！

「今お茶を入れますね。サラ、戸締りは任せるわ」

「はい！　お母様」

元気の良いお返事ですね。

オレオレ詐欺（後書き）

ラミアさんがボケてくれると
話の進みがエライ早くて助かります

「改めて自己紹介しましょうか」

なんとか家に入れてもらえたサイモンさんも交えて食卓を囲む私達。

ちなみに、サイモンさんが家に入れてもらえたのはつい先ほど、食事の準備が整ってからである。

「わたしはラミア＝バッティーク。専業主婦で、趣味は料理。一応、サイモンの妻でもあります」

「一応って……」

サイモンさんが項垂れているのは無視。

「サラ＝バックティークです。１５歳ですので、来年から魔術学院に入学の予定です」

出来たお子さんだ。

容姿はラミアさんに似ているのだが、中身はサイモンさんには似

ても似つかないしっかりとしたモノだ。

どういう化学変化が起こって、この子が生まれたのかとても気になる所だけど。

「私はサヤ＝ムラサメです。奴隷としてサイモンさんに買われてやってきました。これからよろしくお願いします。旦那様、奥様、お嬢様」

深く頭を下げながら自己紹介。

これからお世話になるのだ、これくらいは普通だと思う。

「あらあら、そんな畏まらなくてもいいのよ。わたし達の事は家族だと思ってくれれば嬉しいわ」

「そうだよサヤ、これから僕たちは家族だ」

家族……

家族か。

私はそもそも普通の家族って言うのが分からないんだけどね。

「サヤちゃん」

「は、はい」

「自分の事を『奴隷』なんて言っちゃダメよ」

おっとりした表情でも、しっかりとした口調で諭す言葉。

「そうね、わたしの呼び方もラミアで良いわよ」

「あ、ワタシのこともサラって呼んでください」

「僕の事はサイモン様と――――」

「分かりました、ラミアさん、サラちゃん、旦那様」

「あれ！？　どうして僕だけ――――」

「本当は敬語も使わなくてもいいのだけど、それは追々直して行くといいわ」

「僕が悪かった！　だからサイモンさんって呼んで――――」

「さぁ！　冷めてしまわない内に食事にしましょう。今日は腕によりをかけたのよ」

暖かい。

本当に暖かい家庭。

異世界に来て、奴隷になって。

それでもこの暖かさがあれば此処に来た意味はあったと思えるくらいに暖かい。

自分の居場所は此処じゃないとハッキリ思えるくらいに、自分が酷く場違いな気がして仕方ない。

それを顔には出さず、楽しい振りをして食事をする、談笑に混ざる。

今日は早く寝てしまおう。

それが良い。

嫌な事は忘れて、惰眠を貪ろうじゃないか！

家族（後書き）

遂に総合評価１００ポイントです
最初の目標だった3桁です
今の時点で3桁は早いのか遅いのか、判断しかねますが3桁です
ＰＶ3万　ユニーク5千　嬉しい限りですね。
これからも頑張って行こうって思えますよ

感想とか指摘とか待ってます

夢の中へ

クソ、寝付けない……

眠いはずだ。

体は疲れているし、心も疲労感で一杯なのに、意識は高ぶって仕方ない。

今日感じた肉の感触。

久しぶり過ぎて新鮮に感じたせいだろうか。

肉を抉って行く剣先。

骨を断つ時の抵抗。

命を奪ったと確信できる感触。

「……」

無理やり眼を閉じ、夢の中へと落ちて行く。

無理に寝ると絶対に悪夢を見ると言う確信はあったが、それでも

起きているよりはずっと良いと、その時は思った。

目の前に死体がある。

誰のだろう？

今日殺した盗賊に見える。

顔が苦痛に歪んでいるのが分かるが、どうしようもない。

もう死んでいるのだから、苦痛を和らげる事も出来ない。

死体が増える。

たぶん、この世界に来てから初めて殺した近衛兵。

また増える。

名前も知らない誰か。

突然、私を襲ってきた誰か。

同じ修練を積んでいた同族。

人生で初めて殺した、浅木祐樹（あさぎゆうき）。

そして――――

実の父親。

今更だ。

罪悪感も嫌悪感も浮かばない。

「本当に？」

屍の上に座り込む、誰かの声に応える様に呟く。

「殺した相手に何を思えばいいのか、分からないんだよ」

「最初に人を殺した時も、そう思った？」

「何も思わなかった」

「実の父親を殺した時も？」

「何も、思わなかったよ」

そうだ。

幼馴染で、お節介で、私の事が好きだった癖に、隠そうとしていた祐樹。

あれだけ親しくしていても、結局は何も思わなかった。

実の父親、アレはアレで嫌悪感しかもっていなかったけど。

肉親を殺した時でさえ、何も思わなかった。

ああ、結局私も久我家の一員なんだなって、実感しただけ。

だから、覚悟を決めた。

殺した相手も自分も納得できるような覚悟を――――――

「――――――」

地味にダメージでかい

「朝ですよ！」

「――――――むぅ……」

太陽の光と、大きな声で強制的に意識が覚醒する。

悪夢を見て居た様な気がするが、幸か不幸か内容は覚えていない。

なんだろう、不快感はあるのに原因が分からないって、いや、原因は悪夢のせいなんだろうけど。

「朝ごはん出来てるよ。サヤお姉ちゃん」

お……お姉ちゃん！？

年齢的にはそこまで離れてないし、そもそも童顔の所為で同い年くらいに見えるのに！

純真無垢なロリ……もとい、お子様からお姉ちゃん！！

やば、鼻血でそう。

「どうしたの？」

私からでる黒いオーラを敏感に察知したのか、少しだけ後ずさるサラちゃん。

地味にダメージがでかい。

サイモンさんの気持ちが少しだけ、分かった気がした。

買って貰った私服に着替えてリビングに向かうと、既に食事の準備はされており、サイモンさんとラミアさんが待っていた。

そのテーブルにサラが向かい、私は開いている席へと向かう。

「おはよう、ございます」

「おはよう、サヤ」

「サヤちゃん、おはよう」

「さ、朝ごはんが冷めない内に食べようじゃないか」

目玉焼き（何の卵かは知らないが）とトースト、サラダ、牛乳（の様な物）と、普通の朝食。

「サヤは昨日から家族になった訳だが、働かざる者食うべからずと言って――」

「サヤちゃんにはお手伝いをして貰います」

サイモンさんの語りを無視してラミアさんが提案する。

働かざる者食うべからずって諺こっちにもあるのかって驚愕は、頭の隅っこに置いておく。

あれ、格言だっけ？

「掃除洗濯、主に炊事関係ね」

「それなら大丈夫です」

家事なら大丈夫。

これでも一人暮らし歴は2年！

あ、でも高い物とか異世界のモノだと扱い違うのかな？

それ以前に洗濯板で洗濯が基本の世界で家事とかどうするんだ？

「今日は、お使いに行って貰いましょう」

「サイモンさんも一緒にですか？」

「え、何でだい？」

「いえ、刻印があるので契約主から離れられないんですよ、私」

思い出したように設定を持ち出す。

うん、私も今の今まで忘れてたんだけどね。

「ああ、それなら大丈夫、このセントリア貿易都市内なら自由に動き回れるようになってるから」

都市の外に出る場合は僕が同行しないと駄目だけどねって、この刻印の設定って結構な融通が利くっぽいな。

これがご都合主義って奴か！

そもそも、ご都合主義なら奴隷になんぞなっとらんのだがな……

「はい、これが貿易都市内で使われてるセント硬貨」

見せてもらった初めての硬貨。

ハッキリ言って、違いが分からない。

金貨、銀貨、銅貨は分かるのだが、もう2枚は何だろうか？

「高い順に、白金貨、金貨、銀貨、銅貨、鉄貨」

白金？

もしかして、プラチナ？

まあ何でもいいや。

貨幣価値は鉄貨１０枚で銅貨１枚。

銅貨１０枚で銀貨１枚。

銀貨１００枚で金貨１枚。

金貨１００枚で白金１枚。

結構分かりやすい上に、銅貨１枚が１００円くらいの価値っぽい。

それを考えると１金貨が１０万円、１白金貨が……考えるのはやめよう、どうせ私には縁がないものだし。

まあ、後は実践だけ、サラちゃんも一緒に行ってくれるらしいの

で問題なく任務は達成できそうですよ。

地味にダメージでかい（後書き）

久しぶりにこのノリです
真面目な話は肩凝って仕方ないですね
次回からはしばらくこんなノリが続くはず……

感想とか指摘とか待ってます

小学生の日記

街に出るといろんな人がいる。

お使い気分で出たはいいけど、眼が回りそうなほど人が多い。

王都では祭りの時期だからこそアレだけの人がいたんだろうけれど。

此処は平日、何も無い状態でこれらしい。

それに、王都では人種に統一性があったのだが、ここはもっと雑多とした感じだ。

背が異様に高い男性、３メートルくらいあると思う。

首が痛い。

髪がピンク色の女性、眼が眩む。

眼とか以上に心が痛い。

肌が黒い人。

本当に真っ黒、インド人もびっくりの黒さ。

とってもちっちゃい人、５０センチくらい。

それと、猫耳。

……

猫耳！？

良く見渡せば猫耳以外にも犬耳とかキツネ耳とか。

それ以前に二足歩行で歩く猫とか犬がいるし！

これこそファンシー、もとい、ファンタジーってもんですね。

「サヤお姉ちゃん、買い物は何を頼まれたんですか」

「うーん？　えっと、ちょっと待ってね」

サラちゃんに聞かれて、ポケットにしまっておいたメモ帳を取り出し確認しながら読み上げる。

「ベリとフェー、ラキ、胡椒、コラット、グルの肉、これだけだよ」

「やりましたね、今日はカレーですよ！」

待ってくれ。

さっきの食材でどうしてカレーが出てくるのか私には理解できん。

あれか？　私は人参ジャガイモタマネギお肉と列挙してたとでも言うのか？

胡椒は既に変換済みだったから良かったものの、他の食材は私の脳内変換が全く働いていない。

まあ、その辺はなんとかなるか。

「まずはベリとかラキを買いに行きましょう。こっちですよ！」

「ハイハイ、今行きますから」

カレーが好きなのか、はしゃぐサラに追いつくため、少しばかり歩く速度を上げながら雑多な街を見まわして行く。

この辺りは住宅街を抜けたばかりだというのに、土産物、簡易食材（駄菓子みたいなモノだろうか？）などなど、貿易都市の名に恥じないカオスぶりが発揮されていると言っていい。

「サヤお姉ちゃん！」

見るのに忙しく、歩く速度が遅くなっていたらしい。

サラちゃんに急かされ、今度は小走りで向かう。

まあ、迷子になる事は無いだろう。

今日はカレーらしいので私も腕によりをかけてお手伝いをしようじゃないか！

追記。

サラちゃんとの買い物は楽しかった。

また行きたいです。

小学生の日記か！

サルでも分かる

サイモン家に来て早数週間。

それなりに生活に慣れ、食に改革をもたらした私はふと思い出して、書庫へと向かっている。

うん、忘れる所だったよ。

そう。

魔法である。

使えるなら使ってみたいもんだけどね。

やっぱり憧れ？

書庫の扉を開――――く前に中の気配を探る。

誰もいない様だ。

いや～、迷探偵さんが居たら如何してくれようかと思ってたけど、居なかったか～。

ドアを勢い良く開け放つ。

「たのも～！」

……

うん、誰も居ないんだから当たり前だよね。

書庫の中はゲイルの家よりも雑多として居て、種類も豊富そうに見える。

何を隠そう、我が家のサイモンさん、現ご主人様は考古学者にして翻訳家を生業としているのです！

最初は趣味の考古学で難しい言語を翻訳なりなんなりしているうちに、多種多様な言語を習得していたとか何とか。

趣味と実益を両立したみたいですね。

そのサイモンさんが誇る巨大書庫。

人は其れを『世界のゴミ場庫（アカシックレコード）』と呼ぶ。

まあ、壮大に言ったけど、そう呼んでるのは私とサラちゃんくらいなモノなんだけどね。

実情はただ掃除してないだけの図書館である。

汚いけど、探せば大抵の知識は此処で手に入ると言っていい。

そう言えばどんな本探せばいいんだろ？

『初心者用魔法入門』とか、『鉄板！　初級魔法１００選』とか無いかな？

無いですよね、そうで――――

その瞬間目についた。

『サルでも分かる！
　魔法の使い方　～入門編～』

何故……

まあ良いか。

取り合えず拾い上げてページを開く。

『序章　～この本の在り方について～
この本はサルでも分かるような簡単なものです。

まずは魔力を認識してみましょう。
それさえ認識できない様な場合、貴方にこの本は必要ありません。
早急に捨て去るか、病院に行く事をお勧めします』

バカにされてる気がする。

いや待て、確実にバカにしているだろ！！

投げ捨ててやりたい気持ちを抑えつつ、これさえ読み終われば魔法が使えるという希望を一緒に捨て去る訳にはいかないとページを進める。

『第一章　～魔力を感じよう～
まずは自分の中に在る力を認識しましょう。
胸に手を当てて、大きく深呼吸をしながら――』

なるほど、意外と中身はまともそうだな。

書いてある通りに行動しつつ、続きを読んで行く。

『深呼吸しても上下しない自分の胸の無さが実感できましたか？』

「やかましいわ！！」

思わず本を床に投げつける。

星になった（前書き）

今日で一ヶ月？
投稿開始一ヶ月ですかね？

星になった

あ！　いけないいけない。

これは希望、魔法への第一歩。

なんとか自分を納得させることに成功。

一度念入りに踏みつけてから拾い上げる。

大丈夫、きっと大丈夫。

自分を説得させつつページをめくる。

『第二章　～魔力の通り道を作りましょう～
魔力があってもそれが通る道が無ければ魔力は意味がありません。
血液があっても血管が無ければ意味がない様に』

おお、意外とまともな事が書いてある。

少しだけ期待度が上がる。

『魔力が何処に在るかは前章で把握している筈なので、
そこから魔力の通り道を創っていきます』

前章？　そんなモノは無かった。

『此処からは下腹部に焦点を置きます。
理由は多々ありますが、説明しやすく。
またここに魔力を貯め込む人が多い点が挙げられます』

ほうほう、なるほど。

って事は、私も下腹部に貯め込んでる可能性が高い訳だ。

なんとなく下腹部を摩りながら続きを読む。

『何より、エロイから下腹部に焦点を当てます』

知るか！！

いや待て、説明自体は良かった。

最後の一文が余計だっただけで、そう、説明自体はまともだったのだ。

『第三章　～魔力を体外に放出しましょう～』

あれ？

第二章の通り道はどこいった？

『前章に関わってくる問題ですが、
魔力の道は限られています』

ほ～、分かりやすい。

流石サルでも分かる入門書。

『下腹部に魔力を貯め込んでいる場合、
まずは前屈を行い、腰から利き手にかけて体を解して行きましょう』

準備体操のようなものだろう。

適当に体を解して行く。

『この準備体操に意味はありませんが、
第一章でこの本を投げ捨てて居ない胸の大きな人は、
第三者の目から見ればエロさ満点、目の保養になること間違いなしです』

――――ぶちっ

何かが、キレた音がした。

『終章　～免許～
この本を読んで居る貴方は既にご存じだと思いますが、
魔法を使うには免許が必要となります。
入門編以上の事をする場合、しっかりと免許を取得してから行いましょう。
それでは、初級編でまたお会いできる事を楽しみに待っています』

本を閉じる。

深呼吸を行なう。

窓へと歩み寄り、そっと窓を開ける。

とってもいい天気だ。

「大事な事は、一番最初に――――」

大きく振りかぶって。

「書いとけこのやろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！」

本を投げ飛ばす。

「アイツは、星になったのさ」

清々しい気持ちで、どこかへ飛んで行った本を見送る。

いや～、なんか変な夢見てた。

うん、何も無かった。

本探そう。

きっと何かあるさ。

その後探し出した本の数々を元に、蝋燭に火を付けるくらいの魔法が出来る様になった。

あはは。

才能無いな、私。

ま、一朝一夕で手に入る様な物なら学園とか存在して無いですよね。

気長に勉強、努力、反復練習。

結局これが大事なんですよ。

星になった（後書き）

ＰＶ４万
ユニーク６千
お気に入り登録して下さった６０名の皆様に感謝をこめて

ありがとうございます

今日は１ヶ月記念日
きっと何かいい事ある
気がする。

枚数にすれば16枚

魔法の練習は日々欠かさず、本と睨めっこが続く毎日。

遂にコップ一杯の水を発生させることに成功しました！

家事の合間に練習してるからあんまり時間も無いしね。

あ、免許？

バレない罪は罰を受けない。

これ世間の常識よ。

大きな家の家事をこなして行く事にも慣れて来たよ。

そして今日は絶好の布団干し日和。

「よし、今日は布団を干そう！」

「ワタシも手伝います」

サラちゃんとも随分仲良くなった気がする。

ラミアさんのペースには未だに慣れないけど。

「サラちゃん、ありがとう！　まずは布団を運ぼうか」

「はい！」

家中の布団をロビーへとかき集めて行く。

とは言っても、使用している布団は４組。

お客様用や予備を含めても計８組。

枚数にすれば１６枚。

数字で見ると意外と多い気がする……

ま、軽い羽毛布団（何の羽毛かは知らない）は2枚3枚といっきに運んでいけるので１５分程で家中の布団を集める事に成功。

サラちゃんの手伝いもあって意外と速く済んだな。

集めた布団は庭に作った簡易干し竿に掛けたり、梯子を使って屋根の上に運んで行く。

サラちゃんが屋根の上に上がりたそうにしているが、屋根の上は危険なのでサラちゃんを上がらせる訳にはいかない。

落ちたりしたら骨折じゃ済まないんだよ。

しかし、いい眺めだな。

住宅街と言う事もあってか、屋根の上からの見晴らしはそこそこ良い。

天気もいいし、お昼寝したいなあ。

『寝ちまえよ。布団だってすぐ傍に在るじゃないか』

（悪魔の囁き、でもサラちゃんも手伝ってくれてるのに……）

『サラちゃんと一緒に寝ればいいじゃないですか』

（おっと、天使のキミは普通止める側じゃないのかい？）

『眠い、寝よう、布団ふかふか、天気最高』

（くっ……　睡魔軍まで来るなんて）

「サヤお姉ちゃん、これが最後の布団だよ～！！」

下からサラちゃんの声が聞こえる。

『サラチャンを呼べば一緒にお昼寝だぜ～』

『いちゃいちゃしながらお昼寝……最高じゃないですか！』

『ネヨウ、ネヨウ、ネヨウ』

（おおう、お前ら一斉攻撃か、でもそんな誘惑に私は負けないんだ！）

「サヤお姉ちゃん？」

心配そうな声に、天使や悪魔、睡魔の誘惑を振り切って応える。

「今(あがっておいで)そっちに行くから！」

あれ？

「良いの！？」

いやいや、良くない、良くないです。

「私がそっちに行くから！」

『勝敗は決した、諦めろよ』

『幼女とお昼寝ですよ。もっと喜びましょう！』

（幼女とお昼寝……最高だな！！）

梯子を掛けてた辺りに白い悪魔が！

まあ、布団背負ったサラちゃんなんだけどね。

「わあ、本当にいい天気ですね」

上がって来ちゃったものは仕方無い。

これは是非とも一緒にお昼寝しなければ！

「良い天気だし、お昼寝しようか！」

「いいですけど、眼が怪しいです」

「何を言っているんだい？　私の眼はピュアピュアだよ」

ついでに体もピュアピュアですよ。

修学旅行で行った某所の有名な占い師さんによれば、彼氏居ない歴は前世から続いていますが何か？

「オーラも怪しいです」

「何を言っているんだい？　私のオーラはピンク色（ピュアピュア）だよ」

「言動も怪しいです」

『完全に変質者ですね』

（天使の癖に何言ってんの！？）

『完全に変態だな』

（悪魔は黙ってろよ！）

「ワ、ワタシ、もう降りますね……」

どうしよう。

完全に警戒されてる。

幼女とお昼寝出来ないなんて、神は我を見放した！！

『力が、欲しいか？』

（力より知恵だって何度言えば分かるんだよ、この役立たず神！）

『幼女を押し倒す力が、欲しいか？』

（――――！？）

『力が欲しければ、願え――――』

（待て待て待て！　それ変質者とか変態以前に犯罪者の仲間入りだろ！？）

『性犯罪者の力を！』

（もう眠っててくれよ！　私の中で永遠に眠っててくれよ！！）

煩悩を振り払うように布団へダイブ！

ボフッ――――という良い音を立てながら見事な着布団に成功。

「ああ、気持ちいい～」

最初の方に干して置いた物にダイブしたので割と暖かい。

ああ、お日様の匂いって奴だね。

豆知識。

お日様の匂いって言われてるアレ、実はノミとかダニの死骸の匂い。

あ、要らなかった？

でも良い匂いだから私は気にしな～い。

「……ぅ」

おや、サラちゃんが仲間に入りたそうにこちらを見ている。

仲間にしますか？

＞　ＹＥＳ

　　はい

む、難しい選択だな。

人生でトップ３に入る選択だよ。

しかし、私の答えは既に出ている！

はＥＳ！！

「サラちゃんもこっちにおいで～、気持ちいいよ～」

傍から見たら幽鬼の如く、私はサラちゃんを天国（ふとん）へと誘う。

「……うぅ～」

サラちゃんは悩んでいるようだ。

「むぅ――――――――――えいっ！！」

意を決したように私の隣の布団へダイブ。

「わあ！　本当にふかふかで――――すぅ」

即寝！？

何秒とかじゃないよ。

これは〇び太くん以上の早さだった気がする。

あれ！？

そう言えばいちゃいちゃ出来てない！！

いちゃいちゃする前に寝るなんて、想定の範囲外だった。

仕方ない、私も寝よう。

今日は本当に良い天気だ。

ピュアピュア（後書き）

次からやっと物語が動きます
動くはずです
動かして見せます
きっと　動いたら　いいな～

2コンボ

この家に来てから二ヶ月。

ラミアさんやサラとも仲良くなって、快適な奴隷生活満喫中です。

三食昼寝(サボリ)付きで月給銀貨5枚。

お小遣いとかじゃないです。

ええ、給料です。

断じて子供に渡すお小遣いじゃないんです！

あ、サラとは何時の間にか姉妹の様に仲良くなりました。

今では『サラちゃん』って呼ぶと反抗期なのかちょっと怒られるんです。

無視されるんです。

お姉ちゃんちょっと悲しいです。

気を取り直して、そんなある日、我が家に訪問者が現れたのです。

「ただいま～」

「どなた様でしょうか？」

「あ、すいません。間違えたみたいです」

イケメンだけど雰囲気が軽い残念な人が訪ねて来たと思ったら、すぐに扉を閉めて帰って行った。

なんだったんだ？

「待ってくれ、此処は僕の家だろう！？」

「いえ、ここには奥様とお嬢様、それに使用人の私しか住んでいませんが？」

「旦那様！　奥さんとお嬢さんがいたら旦那さんも居るはずだ！」

「え？」

「……」

ん？　あれ？

「ああ！　ご主人様じゃないですか！！」

「どうしてそっちに行った！」

「いえ、ちゃんと名前も覚えていますよ。軽い冗談じゃないですか、旦那様」

「――僕の名前は？」

「えっと……」

「……」

そう、サから始まる四文字だった気がするんだ。

サ、サ、サ～。

サリ……じゃない。

サイ――ッ！！

「お帰りなさいませ、サイケンさん！」

「サイモンだ！　サイモン＝バックティーク！！」

一文字違い、惜しかった。

「お客様でしたら客間にお通しして下さいね～」

家の奥からラミアさんの声。

そうだな、こんな所で立ち話ってお客様に失礼だった。

「では、客間にお通しします――」

「僕はこの家の主人のはずだよな……」

流石に落ち込んでいる。

「そう言えば最近見ないと思っていましたけど、長い散歩でしたね」

「散歩に出て帰って来られないほどボケてないし、もう少し僕の事も気にしてくれ」

「あ、客間はこちらになります。少々お待ちくだ――」

「仕事で出てただけだでこの仕打ちか、何を、間違ったんだろうな」

あ、いじめ過ぎたかな？

「そのオジサン、誰？」

ああっと！　ここでサラからの見事な右ストレートが決まった！！

「サヤ、知らない人を家に入れちゃ駄目だよ」

まさかの2コンボ！

その後、撃沈したサイモンさんを仕事部屋に運び込み、表に止めてあった馬車から荷物を運び込み、ついでに食糧と水を運び込んで軟禁状態にしようとしたところで――

「待ってくれ！」

待ったがかかる。

2コンボ（後書き）

あれ？
そんなに動いて無い？
そんなまさか
あれ～？

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7822w/

奴隷少女は規格外

2011年10月19日07時09分発行